



国際ロータリー第2520地区台6分区(松塩グループ)
THE ROTARY CLUB OF SHICHIGAHAMA
七ヶ浜ロータリー・クラブ会報

会長; 山崎澄義・幹事: 渡邊 亨 / 副会長: 渡邊陽一 / 副幹事; 岡崎正憲
例会場; 七ヶ浜町・七ヶ浜国際村・電話; 022-357-5931・例会日; 月曜日 18:30



2011～12 国際ロータリー

絆がんばっぺ～

七ヶ浜ロータリー・クラブ

国際ロータリー第2520地区

七ヶ浜ロータリー

平成24年1月16日 第818回・本年度第22回例会 場所:かみ村(月)18:30

<会長の時間>

改めまして平成24年が明けましておめでとうございます。

本日は特別代表であり名誉会員の渡邊源左衛門様をお迎えして初例会並びに新年会を開催出来ますこと誠に嬉しくまた感謝申し上げます。

震災後、復興元年として会員皆様のご協力の元半年が経ちました。この間国内外のロータリー・クラブから様々な支援をいただき被災地のロータリー・クラブとしてやれる事をそれなりに実施して参りました。今後も引き続き機会あるごとに連携をとりながら進めて行きたいと考えておりますので会員皆様のご協力をお願い致します。

本年は辰年で十二支のなかでは唯一空を飛ぶ干支になります。

昇り竜のごとく会員の皆さんがロータリアンとして職業奉仕を通して自らの復興と地域復興へ貢献していただけた幸いです。病氣療養中の会員の皆さんの早い回復と本日お集まりの皆さんのご多幸とご健勝を祈念しまして会長挨拶といたします。

<第818回例会幹事報告>

1. 第2520地区第6分区ガバナー補佐より、「震災復興支援会議(第4回)」開催案内が届いております。

日時 平成24年1月17日

場所 ホテルグランドパレス

引き続き「新年祝賀会」に入ります。

次週以降例会プログラム予定

1月23日(月)クラブ奉仕委員会担当例会

1月30日(月)「半期会計報告」

【親睦委員会】...ゲスト及びビジター

特別代表・名誉会員 渡邊 源左衛門 様

【出席委員会】...本日の出席数(率)及び前回修正・20名中17名出席 85%前回修正・前々回修正ナシ

平成 24 年 1 月 23 日 第 819 回・本年度第 23 回例会 場所:七ヶ浜国際村(月)18:30

<会長の時間>

おばんでございます。今週はロータリー追悼記念週間にあたります。

1947年1月27日は、ロータリーの創始者ポール・ハリスは、カムリー・バンクの自宅でこの世を去った。享年78歳。1月30日、小雪の降りしきる中で行われた告別式には、多くのロータリアンが参列し、チェスレー・ペリー、トーマス・ウォレン、リチャード・ヘドケが弔辞を述べた。

毎年1月27日を含む1週間を、物故ロータリアンの冥福を祈り、生前の貢献を記念する週間として「追悼記念週間」に指定されています。

合わせてロータリー理解推進月間にもなっています。

会員の皆さんにはロータリーについて知識と理解を一層深めてもらい、同時にロータリアン以外の、一般市民にもロータリーのことをよく知ってもらうための努力をしていくことが、先輩ロータリアンへの追悼になるものだと思いますので今後のクラブ行事へのご協力宜しくお願い致します。

<第 819 回例会幹事報告>

1. 第 2520 地区ガバナーより、「ガバナー・ノミニ - 推薦について」の文書届いております。
2. 第 2520 地区ガバナーより、「復興状況アンケートのお願い」の文書が届いております。
3. 第 2520 地区ガバナー事務所より、「2月のロータリーレート」のお知らせが届いております。 **1ドル=78円**
4. 七ヶ浜国際交流協会会長より、「役員会」「お正月イベント第2回実行委員会の開催について」の案内が届いております。

日 時 平成23年1月23日(月)午後7時30分～

場 所 七ヶ浜国際村 セミナ - 室2

5. 例会終了後、「第1回創立20周年記念行事準備委員会」を開催いたします。

次週以降例会プログラム予定

1月30日(月)「半期会計報告」

2月6日(月)米山記念奨学会委員会担当例会

【親睦委員会】...ゲスト及びビジター

【出席委員会】.....本日の出席数(率)及び前回修正

20名中 19名出席 95% 前回修正・前々回修正ナシ

平成 24 年 1 月 30 日 第 820 回・本年度第 24 回例会 場所:七ヶ浜国際村(月)18:30

<会長の時間>

おばんでございます。

昨日の七ヶ浜国際交流協会主催の「あそぶさございん“七ヶ浜 de お正月”」イベントに早朝より12名の会員の皆さんに参画を頂き有難うございました。

皆様のご協力によりロータリークラブ担当の「焼き芋」は滞りなく無事に終了する事が出来ました。

会場には、「がんばろう 七ヶ浜」のぼり旗を設置し、寒さ対策には渡辺透会員がストーブを提供してくれました。昨年よりも設営に工夫がなされ、また来場者の方には積極的に声掛けをするなどロータリークラブの奉仕の精神が伝わった事と思います。来場者数は約460人で昨年並みとの事でした。また合わせて行いました募金は¥14,029の善意を頂戴しまし

た。主催者からも好評を得ましたのでご報告いたします。

<第820回例会幹事報告>

1. 第2520地区ガバナーより、「復興中の写真募集」の文書届いております。
2. 第2520地区第6分区ガバナー補佐より、「第2520地区第6分区松塩グル - プローターリー創立合同例会の開催案内」が届いております。

日 時 平成24年2月23日(木)午後6時～

場 所 十符の里プラザ・文化ホ - ル (利府町中央2-11-2TEL022-3576-2125)

登録料 5,000円(全員登録)

3. ローターリーの友事務所より、「ロータリーの友2月号」が届いております。

引き続き『前期会計報告』に入ります。

次週以降例会プログラム予定

2月06日(月)米山記念奨学会委員会担当例会

2月13日(月)プログラム委員会担当例会

【親睦委員会】...ゲスト及びビジター

【出席委員会】.....本日の出席数(率)及び前回修正

20名中 19名出席 95% 前回修正・前々回修正ナシ

平成24年2月6日 第821回・本年度第25回例会 場所七ヶ浜国際村(月)18:30

<会長の時間>

おぼんでございます。

本日はゲストスピーカーとして米山奨学生の「ユン ヒョンミ」さんをお迎えしております。ようこそ七ヶ浜ロータリークラブへお出でいただき感謝申し上げます。

例会時間の半分を卓話にあてている訳ですが、ロータリアンとして毎週いろんな方達の卓話を聞く機会にめぐまれていることに改めて感謝したいと思います。本日の卓話も楽しみにしておりましたのでどうぞ宜しくお願い致します。

今月の会員誕生日をお知らせします。

2月2日に渡邊陽一会員が51才になります。

2月22日に鈴木喜市会員が64才になります。

今月の結婚記念日をお知らせします。

2月11日に佐藤 孝会員。

2月28日に岡崎正憲会員。

それぞれの記念日をお迎えになられた会員の皆様おめでとうございます。

<第821回例会幹事報告>

1. 第2520地区ガバナーより、「第2520地区2011-2012年度記念事業のお知らせ」の文書が届いております。
2. 第2520地区ガバナーより、「11-12年度国際ロータリー第2520地区大会開催のご案内」が届いております。

会長・幹事会

日 時 平成24年4月21日(土)15:45～

場 所 ホテルメトロポリタン仙台

本会議

日 時 平成24年4月22日(日)12:30～

場 所 仙台サンプラザホ - ル

懇親会

日 時 平成24年4月22日(日)17:30~

場 所 ホテルメトロポリタン仙台

2. 第2770地区(埼玉県)第11ゾングバナー補佐及び第2520地区第6分区松塩グループ・ガバナー補佐より、「インタ-シティ・ミ-ティング開催のご案内」の文書届いております。

日 時 平成24年3月17日(土)午後6時~

場 所 ホテルグランドパレス塩釜

(TEL022-362-3111)

登録料 5,000円(全員登録) + 3,000円(交流懇親会出席者)

3. 第2520地区第6分区(松塩グル-プ)ガバナー補佐より、「松塩グル-プ合同三役会のご案内」が届いております。

日 時 平成24年2月14日(火)午後6時30分~

場 所 松緑亭「高富」2F

会 費 5,000円

4. 会 報 仙台南ロータリー・クラブより

次週以降例会プログラム予定

2月13日(月)プログラム委員会担当例会

2月23日(木)「ロータリー創立記念合同例会」

(20日の変更)

【親睦委員会】...ゲスト及びビジター

米山奨学生 ユン・ヒョンミ さん

仙台ロータリー・クラブ 大島 達治 様

【出席委員会】.....本日の出席数(率)及び前回修正

20名中 18名出席 90% 前回修正・前々回修正ナシ

平成 23 年 2 月 13 日 第 822 回・本年度 第 26 回例会 場所:七ヶ浜国際村(月)18:30

<会長の時間>

おばんでございます、来月の3月17日(土曜日)に開催されますIMは日本で初めてとなる第2770地区との合同IMとなります。第2770地区からはガバナーはじめ会員約70名が出席予定です。このIMを通してロータリーの友情と親睦をめて頂きたいと思っております。IMのテーマは「大震災後、ロータリー活動はいかにあるべきか」としております。

先方のクラブは被災地クラブに対する支援活動にも強い意欲を示しており、是非被災クラブの皆様と合同のIMを開催して今後の活動の指針にしたいとの申し入れから実現した次第ですので松塩グループ皆様のご理解とご出席を賜りたいので宜しくお願い致します。

以上ですが先方の会員の皆さんは会費や旅費等の出費だけでなく見舞金等の準備もしてこれと聞いておりますのでクラブの会員の皆様のIMへの出席よろしく願いして会長挨拶とします。

引き続き『クラブ協議会』に入ります。

次週以降例会プログラム予定

2月23日(木)「ロータリー創立記念合同例会」 (20日の変更)

2月27日(月)国際奉仕委員会担当例会

【親睦委員会】...ゲスト及びビジター

【出席委員会】.....本日の出席数(率)及び前回修正

20名中 18名出席 90% 前回修正・前々回修正ナシ
次週以降例会プログラム予定
2月23日(木)「ロータリー創立記念合同例会」(20日の変更)
2月27日(月)国際奉仕委員会担当例会

クラブ協議会

次 第

日 時 平成24年2月13日(月)18:30~
場 所 七ヶ浜国際村

司 会 幹 事 渡邊 亨

1. 挨拶 会 長 山崎 澄義

2. 協 議 議 長 山崎 澄義

「震災モニュメントについて」

「震災後1年・・・これからの事業について」

3. 閉 会 副会長 渡邊 陽一

国際ロータリー第2520地区 第六分区松塩グループ ロータリー創立記念日合同例会

塩 釜ロータリー・クラブ 塩釜東ロータリー・クラブ 大 和ロータリー・クラブ
多賀城ロータリー・クラブ 松 島ロータリー・クラブ 七ヶ浜ロータリー・クラブ
ホスト 利府ロータリー・クラブ
と き 平成24年2月23日(木) 18:30

ご来賓 国際ロータリー元理事 菅野多利雄氏 パストガバナー菅原 周一 氏

2月 世界理解月間 World Understanding Month

1905年2月23日、ポール・ハリス、ガスターパス・ローア、シルベスター・シール、ハイラム・ショーレの4人がシカゴで初めて会合を開いた日で、この日はロータリーの創立記念日です。よって2月は「世界理解月間」と指定されています。

この月間中、ロータリー・クラブは世界平和に不可欠なものとして、理解と善意を強調するクラブ・プログラムを要請されています。

また、2月23日の創立記念日は、世界理解と平和の(World Understanding and Peace Day)と定められ、各クラブはこの日、国際理解と友情と平和へのロータリーの献身を特に認め、強調しなければなりません。

更に2月23日に始まる1週間を「世界理解と平和週間」と呼び、ロータリーの奉仕活動を強調することを決議しました。
七ヶ浜ロータリー・クラブ平成24年2月23日第823回・本年度第27回

平成24年2月27日 第824回・本年度第28回例会 場所七ヶ浜国際村(月)18:30

<会長の時間>

おばんでございます。今晚は国際交流協会の斎藤会長様には公私共お忙しい中、ご出席を賜りましてありがとうございます。本日の卓話どうぞよろしくお願い致します。

さて、先週の「十符の里」で行われましたロータリー創立記念合同例会に出席の14名の皆様出席お疲れ様で

した。

特に、渡邊副会長には急遽挨拶をお願いしまして申し訳なく思っております。次年度開催クラブの会長挨拶と
言うことでエレクトがするようにとのホストクラブからの指示でしたのでご容赦いただきたいと思
います。

懇親会では、来賓並びにクラブ会長席に座らせていただき飲む時間をさいて、先輩ロータリアンの話
に耳を傾けていました。皆さんもそれぞれ、懇親を深められたことと思います。

次年度は、当クラブがホストの予定になっています、20周年記念との兼ね合いもありますが、今
回のも参考にしながら準備を進めて行って欲しいと思っております。

また、今週は震災復興会議、それから20周年記念準備委員会の会議も予定されていますので、
ご担当の会員の皆さんよろしくお願い致します。

< 第 824 回例会幹事報告 >

1. 第 2520 地区ガバナーより、「弔慰金」についての文書が届いております。
2. 第 2520 地区ガバナーエレクトより、「会長エレクト研修セミナー - 開催のご案内」が届いております。
日 時 平成 24 年 3 月 1 8 日 (日) 10 : 30 ~ 15 : 00
場 所 二戸ロイヤルパレス 二戸市福岡字長嶺 3 5 (0195-23-3210)
2. 第 2520 地区復興支援特別委員会より、「出店会員募集 (第 2800 地区大会) 」の文書届いております。
日 時 平成 24 年 4 月 1 日 (日) 場 所 山形市旅籠町
3. 多賀城ロータリー・クラブ会長より、「創立 40 周年記念式典」のご案内が届いております。
日 時 平成 24 年 4 月 7 日 (土) 登録受付 13 : 00 ~
場 所 式 典「東北歴史博物館」
祝賀会「ホテルキャスルプラザ多賀城」 登録料 10,000 円
4. 第 2520 地区第 6 分区ガバナー補佐より、「第 6 分区震災復興支援会議 (第 5 回) 開催」の文書届いてお
ります。
日 時 平成 24 年 3 月 2 日 (金) 18 : 00 ~ 場 所 ホテルグランドパレス塩釜 2 F 万里楼
5. 七ヶ浜国際交流協会会長より、「第 5 回役員会の開催について」の文書が届いております。
日 時 平成 24 年 3 月 5 日 (金) 19 : 30 ~ 場 所 ホテルグランドパレス塩釜 2 F 万里楼
次週以降例会プログラム予定
3 月 26 日 (月) 職業奉仕委員会担当例会
4 月 02 日 (月) 次年度委員会構成について

【親睦委員会】...ゲスト及びビジター

七ヶ浜国際交流協会 会長 齋藤敏昭様・塩釜東ロータリー・クラブ鈴木平勝様

【出席委員会】.....本日の出席数 (率) 及び前回修正

20名中 18名出席 90% 前回修正・前々回修正ナシ

平成 24 年 3 月 5 日第 825 回・本年度第 29 回例会 場所：七ヶ浜国際村 (月) 18 : 30

< 会長の時間 >

おばんでございます。今晚は平副町長にお越しいただいております。

公私お忙しいなか、卓話をお引き受けいただきまして誠に有難うございます。後程よろしく
お願い致します。今日は啓蟄と言う事で春の気配が通常だと感じられる頃なの
でしょうが、昨年の震災時も雪降りだったように
厳しい寒さが続いております。

特に今週は東日本大震災から 1 年と言う事で行事等も多いと聞いておりますので風邪などひかないようくれ

ぐれもお体に注意をはらっていただきたいと思います。

私ごとですが震災後、めちゃくちゃになったままの自分の部屋の片付けをやっと昨日終わらせました。渡邊幹事もお酒を断って1年になろうとしています。この1年がそれぞれいろんな思いの中で過ごして来た事と思います。被災地とそうでない地域との温度差はますます大きくなっているような気がします。その中で、せめてロータリアン同士はその温度差を最小限に届るべく情報交換を今まで以上に活発にして、行き届かないところに心配りをしながらロータリー活動を進めて行きたいと考えております。この1年の皆さんのご苦勞に感謝しまして会長挨拶と致します。これからも頑張ってください。

<第825回例会幹事報告>

1. ロータリーの友事務所より、「ロータリーの友3月号」届いております。

次週以降例会プログラム予定

3月17日(土)IM・14:00 ホテルグランドパレス塩釜 (12日の変更です。)

3月19日(月)クラブ創立記念移動例会

【親睦委員会】...ゲスト及びビジター

七ヶ浜町副町長・震災復興対策室長 平 正美様・塩釜東ロータリー・クラブ 鈴木平勝様

【出席委員会】.....本日の出席数(率)及び前回修正

20名中 18名出席 90% 前回修正・前々回修正ナシ

次週以降例会プログラム予定

3月17日(土)IM・14:00 ホテルグランドパレス塩釜 (12日の変更です。)

3月19日(月)クラブ創立記念移動例会

平成 24 年 3 月 19 日 第 827 回・本年度第 31 回例会 場所：小野屋ホテル(月)18:30

<会長の時間>

おばんでございます。

特別代表の渡邊源左衛門様お忙しいところ、ご出席を賜りまして誠に有難うございます。

後程ご挨拶を宜しくお願い致します。

先週の土曜日に開催されました第2770地区との合同IMへの参加お疲れ様でした。渡邊副会長の発表に川口のさんから感動しましたとの話を頂戴しました。特に第2770地区の第12グループのガバナー補佐からは何かご支援したいとの申し入れのお話もありましたし、当地区ガバナーにも、改めて七ヶ浜の現状を伝えらえた事と思います。副会長のご苦勞に感謝申し上げます。

また当日配布しました被災からの復旧・復興支援の要望書への記入を宜しくお願い致します。皆さんからのご要望取り纏め今月の22日に地区へ申請します。

最後に、渡邊徹会員が急遽入院しましたので、お知らせいたします。詳しい事は、昭さんからお願いしたいと思います。季節の変わり目にもなってきますので、くれぐれも健康には注意してそれぞれの職業奉仕をしていただければと思います。

<第827回例会幹事報告>

1. 第2520地区ガバナーより、「地区大会友愛の広場の展示」の提出期限と提出方法の変更のおしらせが届いております。
2. 第2520地区ガバナー第6分区ガバナー補佐より、「浦戸フェリ-」運航祝賀式典日の変更地区大会友愛の広場の展示」の提出期限と提出方法の変更のおしらせが届いております。

次週以降例会プログラム予定

3月26日(月)職業奉仕委員会担当例会
4月02日(月)次年度委員会構成について

「創立記念祝賀会」

日時 2012年3月19日(月)

場所 小野屋ホテル

次 第

- 司会 親睦委員長 佐藤 孝
会長 山崎 澄義
1. 開会挨拶
 2. 乾杯
 3. 祝宴
 4. 手に手つないで
 5. 閉会挨拶 副会長 渡邊 陽一

<クラブ創立記念会長挨拶>

平成5年3月20日に創立して明日で19年を迎える事になります。

ここまでクラブが存続してこられたのも、特別代表のお蔭の賜物とクラブを代表しまして感謝を申し上げます。本当に有難うございました。

これから更に20周年、30周年と発展していくためにも今後とも重ねてご指導をお願い致します。

初代会長の八木原さんが先の震災で犠牲になるという悲しい事がありましたが、創立時の思いを受け継いで、会員全員がこの被災からの復旧・復興を成し遂げ更には地域への奉仕が出来るよう前進していくことだと思います。

既に来年の20周年に向け、記念事業の準備委員会を設け大町委員長を中心に着々と準備を進めております。

本日は創立19年をお祝いすると共にこれまでの思いを語りながら、会員同士の親睦がさらに深まって行く事を祈念しまして挨拶とさせていただきます。

本日は誠におめでとうございます。

平成 24 年 3 月 26 日 第 828 回・本年度第 32 回例会 場所：七ヶ浜国際村(月)18:30

<会長の時間>

おばんでございます。

先週のクラブ創立19周年記念例会へのご出席お疲れ様でございました。

さぞかし2次会等盛り上がったことと思います。

担当して頂きました佐藤親睦委員長には3次会までお世話になりまして有難うございました。

先週のお彼岸が終わり、行政年度もいよいよあと1週間となり、官民間わず

人事移動に伴う挨拶回りや歓送迎会等もあり何かと落ち着かない今日この頃だと思います。

そんな中、明日の松島大観荘で開催されます、神奈川東ロータリークラブとの

懇親会への出席と翌日の町役場への贈呈式にも大勢の会員が参加していただけるとの事で会員皆様のご協力に感謝致します。

今後も、支援クラブへのお礼参りも随時していきたいと考えておりますので

その際にも皆様のご協力をお願いする事になると思いますのでよろしくお願い致します。

最後に先日行われましたIMでの懇親会で川口東ロータリークラブ会長から

申入れのありました支援については、この度会員の皆さんから頂戴しました

アンケート結果などを伝えて、その中から先方様に選択してもらえようご連絡したいと考えております。

< 第828回例会幹事報告 >

1. 第2520地区ガバナーエレクトより、「2012年地区協議会」開催の案内が届いております。
 - 1.日 時 平成24年5月20日(日)10:30~
 - 2.場 所 二戸文化会館他・・・岩手県二戸市石切所字狼穴1-1・・・TEL0195-23-7111
 - 3.登 録 料 8,000円
 - 4.参加対象者 別紙回覧文書のとおり
2. 久慈ロータリークラブ会長より、「創立50周年記念大会のご案内(仮)」が届いております。
 - 1.日 時 平成24年9月29日(土)13:00~
 - 2.場 所 久慈グランドホテル
 - 3.登 録 料 10,000円
3. 第2520地区より、被災クラブに対する支援金「500,000円」の入金がありました。
4. 理事会時間の変更
4月2日(月)17:30より開催します。場所は例会場です。
4. 第2520地区ガバナーエレクト事務所より、「4月のロータリーレート」が届いております。1ドル=82円
次週以降例会プログラム予定
4月02日(月)次年度委員会構成について
4月07日(土)多賀城RC40周年記念式典 (9日の例会変更)

教育を考える 会報(1・2・3月)・・・第2回

人間と教育

生きることの不思議・・・8	子を信頼する親・・・16	自己との競争・・・26
生命の起源と細胞・・・9	自分との約束を守ること・・・16	自信 自愛 自尊ということ・・・28
考える能力・・・9	仕事に燃えること・・・17	自信・・・30
遺伝と環境・・・10	人間を考える・・・17	自愛・・・30
先生と出会い・・・10	基本的な三つの感謝・・・17	自尊・・・31
それぞれの本質を生かして・・・12	われわれはどこにおるのか・・・19	
教育とは可能性を出すこと・・・13	三つの生命・・・19	
努力こそ大切・・・13	脳について・・・20	
目先にこだわるな・・・15	時間的面から見た命・・・22	
子供に何を望むか・・・15	でる子できない子・・・24	

生きることの不思議

人間にとって最も大切なことは、如何に考え、如何なる心を持つかということであり、ただいくつかの知識を得たということが、大事なことではないのでありまして、最も大切なことは、そういうことを基にして如何に考えるかということです。

まず、生きることは生かされることだということから話を進めましょう。これは生きることの感謝につながるからです。ほ

とんどの人は、その日その日を元気でくらしていますが、うっかりしますと、きょう元気なのは、いかにも自分の力だけのように入います。しかし、学問的に申しますと、これは間違いで、むしろ自分の力はその一部に過ぎないのであります。

われわれの呼吸を考えてみても、植物からの酸素がはいり、植物が育つためには、日光や水の力がはいります。消化を考えてみてもそうであります。食物を食べると、それから先のことは考えてもできませんし、考えておらんわけで自動的に行われるのであります。食べたものが、ことごとくその成分、すなわち、蛋白とか脂肪とか、糖類とか、ビタミン等に分解され、それがしかるべくからだのほうへ栄養としてまわされ、不用のものは、不用のものとして捨てられるのです。詳細のことは現在わからぬことがまだたくさんあるのであります。本などには如何にもわかったように書いてありますが、なかなかそうではないのであります。

とにかく、知らぬ間に、食べたものが日から胃腸へは行ってこなされて吸収される。

吸収されたものは、肝臓で検査を受けて有毒のものは、そこで無毒にされ、量が多ければ、一部はそこで貯蔵されるのであります。質、量ともに適当なものだけが、血液へは行ってからだへ分配されておるのであります。そういう考えてもできないような、現在の自然科学をもってしても説明できないような、むずかしい過程がこの瞬間にもわれわれの体内で行われておるのであります。

心臓でもそうであります。心臓は動いております。血液は体重の十分の一ぐらいしかない、その十分の一の血液で、からだを適当に守っていくには、重点配給でありまして、必要のところへは多く、必要のないところには、少ししか配給しておらぬのであります。

人間のからだで、いちばん血液が多く入っているのは、脳であります。ところが眠っておるときは、胃腸あたりへ多く入っているはずで、手や足は、運動中以外はそれが生きるのに困らない程度の最低の量が入っているのです。そういうふうに、血液の分配までが適当に、知らぬ間に調節されておるのであります。

人間は夜になると眠ります。夜は休みやすい。それはほかならぬ地球の回転のおかげです。地球の回転というのは、地球だけの力ではないのであります。何かの力がなければ、回転をする間に、どこかへ飛んでしまうわけですが、地球が飛ばずに同じ道を回転するのは入たい何の力なのか、それは太陽の引力のおかげだなどという人もありますが、確かではありません。とにかく、地球以外の力がそこに働いて、夜、昼ができ、あるいは春夏秋冬ができて、われわれはそれにならされて生きておるわけであります。

これらのことがらは、何でも入ようであります、考えてみると入へんなことであります。実は、学問もふだん学校などで教わるときには、あんまりよくわからんことまでも、わかりやすくするために、わかったようにして教えられるのであります、これは、学校には時間的な制限がありますから、無理からぬことだと思入ます。しかし、時にはほんとうのことを考えてみる必要があると思入ます。

いま言ったような、呼吸にしても、消化にしても、循環にしても、また、夜の眠りに78しても、自分以外の力がそこに働いておると入ようなことを考えてみますと、生きる入ことは、自分自身の力も零とは申入ませんが、しかし、それ以上に大きなもの、たとえば、酸素をもらうとか、地球回転のおかげで眠るとか入ようなことを考えると、自己以上の力がなくてはできないのであります。生きるには自力と同時に他力があるのであります。入ことは、よく宗教家がいわれ入ますが、科学的に考えても全くそうでありまして、それはけつして迷信とか何とか怪しいものではありません。

入意味で、生きる入ことは、実は、生かされておることなんだ入ことを考えたいと思入ます。毎日、そんなことばかり考えんでもけっこうであります、とにかく食事も眠りも、呼吸もみんな入した他力に入まれてやっておるので、これは何ともありがたいことであります。

生かされておるのは、何も人間だけではないので、すべての生物が入なのであります、しかし、入ことをしみじみと感じ得るのはただ人間だけでありまして、これは実は人間たるもの入の大きな特徴であります。

生命の起源と細胞

そこでこの生命はいつ頃地上に現われたのかと言入ますと、まだ正確にはわかりませんが、最近の研究によると、恐

らく三十数億年前だろうということであり、その生命史の頂点の最後に人間が現われたのであります。

ところで、生物は植物も動物も、基本の構造は細胞だという細胞学説が出たのが、一人三八年から三九年にかけてでありまして、いまから百四十年くらい前のことです。この細胞学説によって、生物は高等なものも下等なものも、最後の単位は細胞だということが明らかになったのであります。

最下等の生物なら細胞はただ一つであります。高等になるにつれ、多数の細胞から成り、人間などでは約五十兆の細胞からできておるのであります。ですから、人間の生命は法律的にはただ一つであります。科学的には一つの生命ではなく、実に約五十兆の細胞的生命の集まりであり、これが全体として大きな一つの生命に統一されておるのであります。世界の総人口は、約五十億ぐらいですから、一人の人間をつくる約五十兆の細胞数はその一万倍にもなります。健康だということは、これらの細胞がみな調和を保って生きておるということで、何たる不思議でありましょう。

考える能力

人間の最大の特徴は、何よりもまず考える能力があることだと前に申しました。これをもっと具体的に申しますと、人間には他のいかなる動物にもないすばらしい脳が与えられて、その働きによって考えるのです。他の動物でも全然考えることができないということではないのですが、それは、相手をさがすとか、食物をさがすというふうな、本能的な行動についてのものが多いのであります。ですから動物では、たとえサルのような高等なものでも、生きるとは、生かされることとか、人間一人の生命が、実は数十兆の細胞的生命の調和の上に立つのであるとか、などというような高等な考え方はできないのであります。

その働きの上から分けますと、人間の生命は、実は科学的には三つの生命が重なってできておるのであります。その中で、第一の最も古い生命は、植物的生命であります。

これは、直接生きるのに必要な呼吸、消化、循環、成長等々を司る生命で、主として内臓の働きでありますので、植物的生命はまた内臓的生命などとも言います。これは先ほども言いましたように、全く知らぬ間に自然に行われるので、また自律的生命などとも言います。

第二の生命は、動物的生命であります。これは環境の変化に応じて、主として本能的に働く生命で、たとえば食物をさがし歩いたり、敵に向かって走ったり、逃げたりするといった運動をするような生命であります。

植物的生命も動物的生命も本能的であります。これらの基礎の上に立った第三の生命が、精神的生命であります。これは精神作用をもとにした高い生命で、これこそは人間的生命を特徴づけるもので、狭義で人間的生命と言え、この精神的生命をさすのであります。

人間的生命は、いまも申しましたように、三つの生命から成るものですが、第一、第二の生命は、本能的な生命でありますから、それだけでは、まだ人間的とは言えないのであります。その上にもう一つ精神的生命が加わって初めて人間らしくなるのであります。

この精神的生命は一人一人みんな違うのであります。一人一人違うということがまた面白いのであります。みんな同じだったら、世の中はさほど面白くないと思うのであります。

世の中には、よく変人などと言われる人がありますが、変人などというものも、なかなか世の中を面白くしているんじゃないですか。私などは若いときには、自分自身変人でありましたから、変人というものにも格別の愛情をもっておるのであります。わざわざ変人になることはありませんでしょうが。

前述の如く、精神的生命こそは、狭い意味での人間的生命であります。その裏打ちをなすものは、極度に発達した脳であり、その中でも特に発育のよい上部の大脳表面であります。この大脳表面が精神的生命を実際に行う場所で、ここには、約百四十億の神経細胞があります。世界総人口の約三倍以上もありますね。これはウィーン大学のエコノミー教授が計算をされたので、人によって多少の違いはありまじょうが、大差はないのであります。

人間は誰にでも大脳表面に百四十億の神経細胞があるのであります。問題は、それをを使うか、使わぬかであります。

今日までの研究によりますと、大脳の表面にある百四十億の神経細胞が、人間の最大の特徴たる精神的生命の裏打

ちになるのでありますが、驚くべきことには地上に現われた大天才と言えども、その全細胞を完全に利用した人はまだ一人もいないということでもあります。これは、学問的な結論で、私が勝手に言っているものではありません。たとえば、ベートーベンの脳などを見ましても、あれほどの天才でも、音楽の本部だとか、聴覚の本部だとか、そういうところはすばらしく発達していますが、そのほかの部分では、普通の人よりもかえってだめなところ、すなわち働いておらぬところさえあるのであります。すなわち人間には子どもにも大脳表面に、精神的生命を裏づけるものとして百四十億の神経細胞がありますが、われわれ人間はまだだれ一人として、それを全部利用した人はない、というのが今日の学問的な結論であります。

すべての子どもが無限の可能性を持っているということは正に驚くべきことでありますが、これは、疑いのない客観的な事実であります。しかし、その百四十億の神経細胞を活用するには努力と情熱のほかはなく、こうした情熱に火をつけることこそが最も重要であります。

私はいま、火をつけるなどとまことに抽象的な、文学的な表現を用いておりますが、総論的には、それ以上に言われないのであります。あとは本人の覚悟と、その周囲、すなわち親とか先生とかの適切な指導などが最大の力になることと思えます。

遺伝と環境

つぎに、遺伝と環境についてお話しします。人間が生まれながらにして与えられておる遺伝の力は、何としても無視することはできません。しかし、研究が進むにつれて、たしかに遺伝というものは非常な力をもっておるけれども、環境の力、個人の覚悟次第で、相当、それに修正を加えることができるということが、次第に明らかになりつつあります。

すばらしい人が出るのは、いままでは、みな遺伝の法則で説明をしておりましたが、それだけではなくて、よい環境がものを言っておると考えられるようになりつつあります。たとえば湯川秀樹さんなどの家庭もそうではありますが、あれは何も生まれつきすばらしい遺伝があったというだけではなくて、その環境もいかに学問をするには適当なところであったのであります。湯川さんは大学のいわゆる優等生ではありませんが、優等生などということに囚われず、楽しんで勉強されたことが、湯川さんのすばらしいところでもあります。優等生にしようなどという家庭のむりな努力がなかったところが見落としてはならないきわめて大事な点であります。湯川家では子どもが喜んで勉強をするような環境になっておりまして、学校の点数のことなどは、家庭では全然問題にされず、勉強の仕方とか、そういうことを語り合うような家庭であったわけでありまして。

湯川さんの兄弟は全部立派になっております。環境さえよければみんな立派になるかということ、なかなかそうばかりには行かないので、もとより遺伝も努力もみな大切です。

子どもの家庭教育については、まず何よりも大切なものは、家庭の環境であり、直接には家庭での親のあり方、生き方だと思えます。どんなに立派なことを言っても、その生活の中に、何の夢もなく、だらしのない生活の中では、とても子どもには勉強しようなどという気持は起こらないでしょう。

先生との出会い

人生の出会い、先生というものが、どのくらい大事かということは、私は身をもって感じているのであります。私の生まれたところは新潟の非常な田舎であります。小学校時代に、私の生涯に影響を与えた先生が二人おられます。

ついに師範学校へ入学できなかった村の代用教員の方であります。

一人は、検定に合格されて、まず小学校の先生に、さらに中学校の先生になって、最後には中学校の校長先生にまでなられた方で、私が教わった時は、新潟市の小学校の先生でありました。お二人は、全然性格が違います。師範学校を受けて入学できなかった先生は、私を秀才扱いにして、非常にかわいがつて下さいました。それは大変ありがたいことなのですが、一つ困ったことがありました。それは、小学校三年ぐらいのときに、高等小学校の一年か二年ぐらいの本を持ってきて「平澤、これを読んでおけ」と言われるのであります。

そう言われれば、読まざるを得ないので、豆字引きを片手に読みましたが、これはちつともおもしろくありませんでした。

それに困ったことは「中学というところは、大変むつかしいところで、お前ははいれどもぶりか、落第ぐらいだろう」などと、中学校の恐ろしさを潜在的にふきこまれたことです。ですから私の中学校に対する考え方は初めは病的でありました。これは先生が、うそを言っておられるのではなく、恐らく先生自身が師範学校の入学不可能を身にしてみ、考えられた結果だろうと思います。そんなことで、私ははじめは、中学は大変なところで、ぶりから一番か、へたをすると落第するかも知れんなどと心配しておりました。おかげで私は中学では実に熱心に勉強することになりました。

もう一人の先生は、新潟市の小学校の先生でありました。私を溺愛してくださった代用教員の先生があまり私に期待をかけられるので、村の小学校へ行くのがいやになり、小学五年生の時、新潟市に子のない叔父がおりましたので、その養子になるつもりで行ってはいった小学校の先生でした。

この頃の子供のなかには、学校へ行くのがいやでうそを言って行かない子どもがあるということを聞きますが、そんなことは、よくあることらしく、私などもその経験者の一人であります。家の人には、何もそんな理由は言わず、ただその叔父のところへ行きたいということで行きましたが、それも五年の一学期だけで、やっぱり生まれた家がよく実家へもどりました。

私が、新潟市の小学校へ転校した最初の習字の時間、担任の先生が私の字を見て、「新潟市の小学校にも、こんなにうまい字を書く者はおらんぞ」と、先生は大変ほめてくだされてすぐに私の字を教室に貼られました。そして先生は「おまえらは新潟市の学校において威張っておるようだけれども、平澤は小さい田舎の学校からきたんだけれども、このくらいまいじゃないか、おまえらの中で、これだけの字の書ける者があるか」などとも言われました。私はうれしいやら、はずかしいやらで困りましたが、しかし、子どもながら非常に大きな刺激になりました。たいへん厳しい先生でしたが、私にはまことにやさしい先生でした。この二人の先生は、意味が違いますが、しかし、私には、やはりありがたい先生でありました。

中学でも、やはり私は私の生涯に関係のある二人の先生をもっております。私は、非常に先生運のいい人間であります。

一人は平安中学一年のときの生徒監をしておられた藤川先生という方で、兵式訓練と体操の先生で学校では非常にやかましくて有名な人でありました。その先生が、私を大変かわいがってくださったのです。私が中学一年の一学期の終わりでありましたが、その時の席次は五番でありました。先にも申しましたように、私は小学校の先生から「おまえは中学へ行けばぶりから一番か、勉強をしてもだめかもしれん」などと言われておりましたので、どうも五番と書いてあるのが信用できず、書き間違いではないかと思って、学校へ聞きに行ったのであります。私の生涯のうちで成績を聞きに行ったのは、この時のたった一度でありますが、その時ちょうど教員室におられたのが、藤川先生だったのです。「いや間違いではない」と先生ははっきりと言われ、その上先生は、私のくそ真面目を非常に高く買われて、「唱歌と図画が悪かったんだね。唱歌と図画さえよければ、おまえはもっと成績が良くなる。五番とは惜しいね。わしだったらもう少し点数をやるぞ」などとまで言ってくださいました。これは私にとっては、非常な激励であります。

ぶりから一番か、落第するかという、小学校の先生のことばを信じて、心配していた私にとって、学校では一番おそろしいと言われる藤川先生が、そうまで言ってくださったのでありますから、その時のことは、いまでも忘れないほどうれしゅうございました。

なるほどやればできるんだなということを、あらためて感じたのであります。

私は中学三年終了で、平安中学から京都府立三中へ転校いたしました。転校した三中の中山校長先生という方がまた実にすばらしい方で、あまり細かいことは言われませんが、大事なところは、実によく見ておられました。校内にある校長宅へは時々よばれて行きましたが、そんな時、よく先生は冗談まじりに「平澤、おまえはだめだ。真面目なのはいいが、おまえには真面目にいらぬものがくっついてる。それは、くそ真面目のくそだ」などと言われました。だめだと言われても悪い意味で言っておられるのではないことは、間のぬけた私にもよくわかります。

中山先生には、その後もいろいろお世話になりました。ざっくばらんな先生でした。

先生は、私が京大総長になり、ご挨拶に行きました時、おめでとうなどは一言も言われませんでした。心配そうな私を見て、しばらくたって言われたのは「いや、心配するな。昔のとおりやれ。必ずやれる。うまくやろうなどと思うな」という言葉でした。先生は九十歳、私は五十七歳でありました。先生は昔の私を覚えていて、そう言ってくださったのです。これは、総長になった時の私にとって、一番ありがたいお言葉で、しかもいざという時には、本当に力となりました。お陰で私は、ほかの人が大騒ぎをするような時には、むしろ落ち着いていることができました。「うまくやろうと思うな。昔のとおりやれ」というのは、自分の信ずるとおりにやればいいのでありますから安心です。

くそ真面目と言って、中学の時に私を冷やかしておられた先生が、私の長所と欠点を見抜いてそう言ってくださったのであります。ありがたいというには、あまりにもありがたいことでもあります。

それぞれの本質を生かして

幸か不幸か、私はとうとう生まれた越後の田舎者の性格をそのまま今日まで持ち続けておるのであります。幸いに、私の周囲の人々は、私の愚かさというものをよく理解して、私を助けてくださいました賢くなれ、なんていうことをあまり聞かずにすんだということも幸いでもあります。

世間の人々は、その顔が違うようにその人柄もその得意な能力もそれぞれ違うのであります。ですから、誰も彼も一つの型に育てようなどということは、意味のないことでもあります。要するに、大切なことは、各人の持つ本質をできるだけ生かすということでもあります。しかし本質というものは、一見してわかるようにはその人の顔に書いてありません。たらんような顔をしていて、実はすばらしい人もあれば、すばらしそうな顔をしていて、実は、中味のない人もあります。そこまで見抜くことも、決して簡単ではありません。

ここで、実際の話として私が大学総長時代に世話をした百人余りの京大卒業生のことを申しあげましょう。求人は大学へ正式に申し込めば、型のごとく、各学部とか、人事委員会等を通して、答が出されるのであります。私個人へくる求人は、私を個人的によく知っておる人々からのもので、これとは違います。「どうも試験をすると、優等生だけが入って困るので、ひとつ何でもこれはものになると思うものを推薦していただけませんか」という申し入れが、総長時代の大年と、その前後を合わせると十年間ぐらいあり、私が推薦した学生は、かれこれ百人ぐらいになるのです。それらは、一人の例外もなくみな立派に成長して、社長なり重役などになり、社会に活躍しております。これは本当にうれしいことでもあります。そして、かつて優等生であった人が下で働いている例も少なくないのであります。

もちろん、私は優等生がつまらんなどというわけではありません。優等生には、優等生としてのよさがあり、それぞれの長所をもっています。優等生は、学生としてやるべき勉強をした人であり、それはそれとして尊重すべきですが、しかし、より複雑な社会は、優等生でなければだめだというようなものではなく、社会には、またより社会に適した型の人も必要なのであります。私が、求人を受けて推薦した人は、何よりも責任を重んじ、いざという時に、絶対に逃げ隠れをしないこと、仕事に対して常に燃える情熱を持つこと、そして温かい人間性の豊かなことなどを最も重要な条件として選んでおります。

そういう型の人、割合にスポーツマンとか、課外活動のマネージャーとか、キャプテンなどをやった人に、多うございませう。

私が推薦をした者は多種多様であります。あまり優等生などという者は入っておりません。たとえばスポーツに熱中しすぎて一年おくれたとか、友だちの病気の世話でピリになったとか、友人をかばって受けないですむ処分を受けたとかそんなような人々が多いのであります。やっぱり、そういう諸君は立派ですね。自分を持ってありますから。断固たる信念を持ってありますから。しかも、その信念、その根性の底には、誠実というものがあります。そういうような者が事に当たれば、最終的にはうまく行きますよ。

大学の助手の時など、私はどうも無器用で、頭の回転もおそく、なかなかほかの助手のようにうまくゆかないのです。しかし、本気でやっていることは、本気なのです。標本をつくるのでも、他の人よりはへたで、時間もかかるのであります。

それでいて、でき上がった私の標本は、残念ながらあまり立派ではないのですね。だが、私が汗を出してやり、いい加減にやっているのではないということを先生方は見てくださいました。これは、ありがたいことです。あれはいくらやってもだめなんだといふふうには、私の場合には、おっしゃらなかったのです。あのくらいやってもできないのなら仕方がないじゃないか。ですから、学生に見せる標本でも他の助手ならベケになるようなものでも、私の場合はまあよからうということになるのであります。

それだけ私にはよい標本をつくるということが、どのくらいむずかしくて、どのくらい技術を要するかということはよくわかり、私ができないだけ、学生諸君には、よく教えることができました。おもしろいですね。す　　とできる人は、ばからしくて上手に教えられないのですが、私は、自分ができませんから、この標本づくりはむずかしいぞと、よく教えることができました。足らんということは、先生としても決してマイナスだけではないのではないかと、私は思います。私の場合などは、確かにそうであります。

それで、学生が私をばかにするかというと、決してそうではなく、私もうまくできないのだということで、かえって学生が元気を出します。とすると、そういうふうなマイナスの面からの指導の仕方もあるかも知れません。

教育とは可能性を引き出すこと

確かに、すべての人が無限の可能性を持っておるといことは、これは断言できます。

断言できますが、しかし、この可能性をいかようにして生かすかということになれば、何よりも、頑張りの精神と実行だと思えます。頑張るといことがなければ、いかに頭がよくとも、学校時代はいかほどいい点がとれても、世の中へ出て、大きなことはできないだろうと、私は思います。

いかように、可能性を引き出すかということについては、これは、本人に、興味を持たせること、面白いと思わせることが第一だろうと思えます。そしてできるまでやらせる。これは、サーカスの調教などでも同じようであります。動物は、それ自身がやろうなどという意志はないのでありますが、あそこでは、ほめられるということよりも、一芸やるごとに、自分の好きな食べものがもらえますから、芸をやるのであります。

そういうようなことで、いつか芸を習い込むのです。人間の場合は、動物よりも鋭い心を持っていますから、馬に教えるとか、ネコに教えるのとは違いますが、しかし、少しぐらいへたでもほめながら、激励をしながらやらせるということは、共通であります。

しかし、それは親の側によほど気持ちのゆとりがあって、社会を広く見ておらぬとできません。何でもかんでも、よい点数をとらせようというような考えでは、とてもできないことでもあります。

親が子供のよき成長を喜ぶということは最も自然であり、美しいことでありますが、子供に要求しすぎるということは、子供の教育において一番危険な点の一つではないかと考えます。

どうも見ておりますと、かつて勉強をしなかった親ほど、またしみじみと努力の味を知らない親ほど、子供に勉強や努力を強制するようであります。自分で、本気になってやった人は、本気になってやっても失敗のあることを知っていますから、あまり無理を言えません。失敗のあることを知るということは、親としても、大事なことだと思うのであります。

努力こそ大切

それから教育の面からものを考えるような場合には、人の伝記などの評価はよほど慎重にせねばならぬと思うのであります。

例えば、ヘレン・ケラーなどは、聖者とか天才とかと言われておりますが、努力精進というような点から考えれば、ヘレン・ケラーも山下清君も同じ列にはいるだろうと思えます。要するに、ヘレン・ケラーは、理解あるよき両親のおかげで、サリバン先生という史上にも例のないすばらしい先生を持ったのであります。サリバン先生というような人は、世界の教育史の上で、もっとほめられていい人であります。寝ても覚めても文字どおり命の限りを燃やして、ヘレン・ケラーの教育に尽くしたのであります。学校へ行く時も、講義を聞く時も、帰ってきてからも、辞書を引く時も、あとでノートを整理する時も、いつでもサリバン先生は、そばにいたのであります。あれだけの先生というものは無いと思えます。しかも、ヘレン・ケ

ラーは、初めから、そんなふうなおとなしい子ではなかったのであります。初めは、動物のような子で、サリバン先生も困ったのであります。サリバン先生の努力と愛情のおかげで、ようやくああいうふうに、ものわりのよい、すなおな子になったのであります。日もきけない、耳も聞こえないヘレン・ケラーをして、大学を優等で卒業せしめたのであります。しかし、あれを奇跡だと片付けるのは、あまりにも、もの見方が粗末であります。彼女こそは、人類の歴史の中で最も努力をした聾啞者であり、手話の指からは、血が出ることも珍しくなかったということでもあります。その努力の中にこそ、ヘレン・ケラーの偉さがあると思うのであります。それはまたそのまま、梅毒病原体による精神病である麻痺狂の原因を明らかにした野口英世博士にもあてはまることです。

あのばい菌を脳の中に発見した野口博士を、世人はみな天才、天才と讃えますが、それは結局、努力の賜物にすぎないのであります。野口博士は、最初の渡米の際、人が世話をしてくれた渡航費用の金を横浜で飲んでしまい、さらに、三度目の金を世話してもらって渡米したのであります。しかし、アメリカでは、渡航費を一晩で飲んでしまったようなエネルギーを尊い研究に捧げて進みに進んだのです。彼の渡米のため、人が世話をしてくれた金を一晩で飲んでしまうというのは、ちょっと無鉄砲とも言われまじうが、この無鉄砲はしかし愛すべき無鉄砲だと私は思います。この無鉄砲を生涯無鉄砲にしておるのならつまらぬのですが、それを彼はアメリカへ行ってから、研究への情熱に変えたので、これらを別々に考えるのは生物学的な見方ではないのでありまじう。

彼が梅毒による精神病者の脳に病原体を発見した時は、朝の二時か三時頃で、自宅においてであります。そこでカッポレを踊るのであります。アメリカ人であります奥さんは、カッポレがわからず、いよいよ主人は気が違ったと心配されたといひます。

昼間研究室で顕微鏡を見、家に帰ってまた夜通し顕微鏡を見るなどということは、普通の人ならとてもできないことです。一日八時間も顕微鏡を見たら、目がへんてこになり、町へ出てもものが見えないくらいになるものです。それを学校で見て、また家へ帰って見たのです。こうして、一万枚の標本のうち、九千九百九十五枚目で初めて、梅毒性病原体を見つけたのです。成功したからよいが、もしくじれば、恐らく世間ではばかと言われるよりほかないでしょう。この時の野口博士の研究方法には、新しい独創的なものは全然ないのです。

いままで、他の人がやった方法だけを用いたのです。一万枚の標本というのは、麻痺狂の脳を適当に切って一万枚の標本をつくったのであります。それを、まず助手二人が見、さらに同じものを野口博士が見たのであります。三人が繰り返し見ても、九千九百九十五枚までは、何もなかったのであります。恐らくほかの人なら、もう途中で見るのをやめると思います。

私は残念ながら一万枚の標本をそこまで見る自信はありません。それだけの自信のある人なら、その時はうまく目的を達しなくとも、何か他の研究の副産物を見つけるだろうと思います。それが、つまり根性であります。

野口博士の麻痺狂病原体の発見は、彼の鈍才の賜物であると、ある人は書いております。賢い人間ではできんという意味でありまじうか。しかし、この鈍才こそは恐るべき鈍才であります。

そんなことを考えますと、彼は一万枚の標本を九千九百九十五枚まで見て、何ともなかった。そこまで見て、そこで病原体を見つけた。ところが、もう一ぺん初めから標本を見直すと、全部の標本にその病原体があったのです。標本に病原体があるといっても、黒い点が一つ出るだけなのです。梅毒の病原体はらせん状であります。普通の顕微鏡で見ると、その断面がただ黒い点として現われるわけなのであります。

天才とか鈍才とかと言いますが、あまり変わりがありません。結局は、やろうという根性だと思うのであります。これがなければ、たとえ優等生でも、その将来はあまり大したことはないと思うのであります。たとえ、つまずきもなく大学まで来て、大学を優等生で出ても、自ら進んでやろうという気持ちがなければ、大きな将来を望むことはできないと思います。

私は、むしろ、一度も落ちないで大学に入る諸君には、あまり多くの期待をかけないのであります。なぜなら、そういう人は、比較的順調にいつている時はよいのですが、一たび逆境に陥ると、それを乗り越え、切り開いていく気力がない人が多いのです。人の一生は不幸の連続のようなものです。学問の研究とても同じであります。私はそんな人よりも、優

等生でなくても結構だが、本当に学問というものに興味と情熱をもって研究をすすめておる人、そういう人にこそ、大きな関心があるのであります。

目先にこだわるな

現実の問題としましては、私は、いま孫が十五人おりまして、幼稚園、小学、中学、高校など、いろいろあります。いまのお母さんの中には子供の学校について、高校、大学はそれぞれどこにやりたいというふうに目あてをつけた人が多いようですが、私の子供たちには、私はそういうことはあまりすすめません。無理をすることはないといいますと、娘たちは、無理をしなかったら、思う学校には入れないじゃありませんかと言いますが、私はそれでもいいじゃないかと考えています。

そこで、最も問題となるのは、人間とは何か、一体子供がどういう人間になるのを願っておるのかということだと思います。ただ何でもよいから早く職につくとか、月給がよけいにもらえるとか等々の人間を考えている人々は、そういうふうにやったらよいでしょう。私などは実際、そういうふうには思いません。

世の中は十分広く、やるべきこともいろいろあります。目の色を変えて集まる所だけが天下の道ではなく、あまりにも人の少ない道もあるのです。細くとも、月を眺めながら、自信をもって悠々と行ける道もあります。人間を殺さずに生きる道や、法を考えるのも面白いではないですか。

孫たちの教育にもそんなふうには言っております。しかし、私の娘たちは、私のところにおる時には、そんな気持ちでいるようではありますが、自分の家に帰り、近所の奥さんなどと話をすると、また迷いが生ずることがあるようであります。むろん私は、細かなことは申しません。こうせねばならんということは申しませんが、ただ一つ言っているのは、どこの学校でも結構だが、入った学校にけちをつけるようなばかなことはするなということです。甲という学校へ入れようと思っていたがだめで、乙というつまらん学校へ入れたなどということは、まるで人間をいかにしてこわすかを研究しているのと同じであります。

子どもに何を望むか

持っておる可能性を伸ばすために、絶対に必要なのは努力であります。あんまり勉強をせんが、学校の成績はいい人もありますが、しかし、そういう人が社会でのびておるかということ、案外のびていないのです。

頭には、いろいろな型がありまして、人の言うことはすぐに了解できるという速度の速い頭もあれば、聞いたことはなかなかわからんが深く考える頭などがあります。湯川さんなどはその第二の型であります。なかなかわからんが、二日目か三日目になりますと、先生以上に深いところまでその問題を考えられるのであります。

私なども、先程からも度々申しますとおり、非常に回転速度がおそく、随分悲観をしたこともあります。どうやらそれで押し通してきました。だが、専門の研究になりますと、頭の回転速度よりも、その深さが問題になってくるので、よほど楽になりました。

もとより回転速度の速い頭は、速い頭として尊い頭であります。みんな私のように回転速度のおそい頭ばかりだったら、世の中は面白くありません。ユーモアだとか、落語なんてことは、やっぱり回転速度の速い頭でないといけません。少々ぐらい間違っても結構だが、おもしろおかしく、さあ とやる、そういう人がおってこそ、世の中は面白く、回転速度のおそい人もどうやら楽しく生きられるのです。

しかし、回転速度がおそくとも、それはそれとして、生きる道があるということも、ありがたいことです。教育の問題では、親自身もそうではありますが、子どもに何を望むかという人生観的な問題も根本問題として大変大事だと思います。人生観の問題、自ら然るべき人生観を持たないで、ただ大騒ぎをしているようでは、迷惑を被るのは、まず第一に子どもであります。

子を信頼する親

私は、小学三年ぐらいに医者になることを決めたのです。私の生まれた所は、その頃、無医村でした。大学を出たら村へ帰って、立派な医者になって、村をよくしようと親子ともども考えたのであります。そして、日本一の村をつくらう。昼は

医者をするが、夜は、夜学校の先生になって、村人に人間教育を施し、医者として余裕ができれば、無条件の奨学制度をつくり、その村から出るいい人は、無条件に勉強させたいなどと考えておりました。

ところが、高校の半ば頃から次第に自分の回転速度のおそい頭と性格の窮屈さに気がつき、大学に進むにつれ恐らく研究生活の方がよからうということに傾き始めました。

その間、いろいろ人間的な悩みも持ち、果たしてこんなことで一体医者になれるのかなどと迷いもいたしました。

大学一年生の時には、ついに私は一時全く絶望的になり、もう大学をやめようかとさえ思ったのであります。私どもの時は、大学は九月に入学をしましたが、そんなことでまだ十二月にもならんうちに、新潟の郷里へ帰りまして、雪の野原をさまよい続けました。しかし、私の家では、天7年は早いね」と言ったきりで、なぜ早く帰ってきたかなどということは、全く聞きませんでした。

これは、私が家では、絶対の信用を得ておったからです。私は、勉強をせよとか、なんとか言われたことはほとんどないのです。中学二年の時、父は寮にいた私に「おまえがよいと思うことは、私も賛成だし、おまえが悪いと思うことは、私も反対だ。だから、細かいことは一々相談せんでもいいから、おまえがよいと思うようにやれ」と言ってくれ、この点、私は全く自由でありました。ですから、中学二年以後は、自分自身で考えて、自らの行動を決めておったのであります。

そんなふうには信用がありましたから、普通なら、妙な時に帰れば、家で何か言われるのでありましようが、ただ、今年は早いねと言ったきりで、何も言いません。もし、私が家の人に、今おれは学校をやめようと思っているなどということ言えば、大変心配するでしょうから、そんなことは、私は何も申しません。

自分との約束を守ること

その年は、非常に、雪の深い年でありました。京都の街におりますと、何かと雑音がはいり、心が落ち着きませんでした。家に帰りますと、見渡す限り雪ひと色で私の心も、次第に静けさを取り戻しました。

雪原を散策中のある日のことです。不思議にも私の耳に、ベートーベンが二十五歳のとき、耳病に悩む自らにむかっての叫びが聞こえたのです。ベートーベンも人生をはかなんで、蒸発を考えたことがあるのです。音楽家でありながら、先天性梅毒で、耳が日毎に悪くなるのです。だが、さすがに彼は、踏みとどまったのであります。

そして、その時、自分自身にむかって叫んだのであります。「勇気を出せ。たとえ肉体にいかなる欠点があろうとも、わが魂は、これに打ち勝たねばならぬ。二十五歳 そうだ、二十五になったのだ。今年こそ、男一匹、ほんものになる覚悟をせねばならぬ」というのであります。不思議に、うち悩む私に、その声がさあっと聞\えてきたのであります。

確かに、私はその時、ノイローゼ的になっていたのであります。それは、精神病者の幻覚のようなものに違いないのであります。しかし、その声が聞こえた瞬間に、私は生まれ変わりました。あの偉大なベートーベンでさえも、なおかつそんなんだ。しかもベートーベンも二十五歳。自分はまだ、そのとき、二十歳であります。で、それは、やらねばいかん。できるとか、できないとかということは、第二の問題だ。とにかく、やれるだけやってみることだ」と思いました。

そこで、結局、大学の講義にはあまり出ないで、毎朝二時に起きて、教授御指定の原書を読んで、勉強をすることにしたのであります。誠に変った勉強法で、決して、これをいい勉強法などとは思っておりません。私は自分とある約束をして、大学へきたのであります。それは、大学では大学の講義を聞き、さらに原書の参考書を読み、この二つをもとにして、自分自身のノートを作ろうということでありました。

ところが、それはとても実行できなかったものであります。原書を読みますと、講義に出る時間がないのです。完全に予定の実行ができなければ、せめてその半分でも実行しよう。では講義への出席と原書の勉強とのどちらを実行するか。普通のように学校へ出てノートをとるのが一番簡単であります。これでは余りにも虫がよすぎるので、むずかしい方をとろうと考えまして、原書を読む方をとることにしたのであります。実習以外はほとんど学校へ出ず、私は、下宿にだけおりましたので、時には、あれは二セ学生ではないかなんて、警察から一度聞きにきたことがあります。いろいろなことがあります。私が私の一生で最も力を注いだのは、何としても自分との約束だけは必ずこれを守ることでした。自らとの約束を守り、己を欺かなければ、人生は必ずなるようにはなると信じて疑いません。

仕事に燃えること

教育などと言えば、たいへんむずかしいことのようにですが、しかし、最も基本のことを本質的に考えれば、それほどむずかしいことではないでしょう。

教育と言っても、まず、物ごころがつかず、自ら考える能力のない子供の頃の第一期と自ら考える力ができて、その判断で行動できる青壮年以後の第二期とを区別せねばなりません。もっとも、この二つの時期の間には、移行期がありますが、これは少なからず個人的に違います。この移行期は、だいたい、小学校の終わり頃から中学二、三年頃までにおよぶようであり、私自身は中学二年頃から第二期の初めのようにありました。

幼少期の第一期は、自ら考え、自らを抑制する能力の乏しい時期ですから、何としても、親とか先生などの指導が大切で、すでに前にも述べました如く、この時期における人間の基本的性格、すなわち誠実、忍耐、親切などの性格形成には、何にもまして親、とくに母の力が大切であります。

第二期、すなわち自主的に考えうる時期になっても、親とか先生、あるいは社会などの影響は決して少なくはありませんが、しかし、自ら判断して行動をきめるべき時期で、人生の最期まで続き、人生の主要部を占める長い時期であります。この時期で、何よりも大切なことは、正しく自ら判断して、これを実行することです。

英国の十八世紀の史家ギッボン博士は、

「あらゆる人間は、二つの教育を持っている。その一つは他人から受ける教育であり、他の一つは、これよりもっと大切なもので、自らが自らに与える教育である。」と言っていますが、これは確かにその通りであります。

自らの自らに対する教育には、ただ、もの知りであるだけではだめで、それ以上に大切なことは、正しい思考力と、やろうと自らに誓ったことは、どんなことがあっても、必ずやり通す実行力です。こういう意味では、人間は断じて他力本願ではなく、あくまでも、自力本願でなければなりません。

燃えて燃えて燃えつくす時、必ず道は開けると信じます。

仕事は人であり、

心であり、

その燃焼である。

人生に絶対に重要なことは、いわゆる、よい頭ではなく、「誠」に徹した火の如き「土根性」であります。

人間を考える

今日ここで皆さんにお会いして「人間を考える」という題でお話をしますことは、私には、たいへん不思議なことであります。これは文字どおり奇跡的なことだなどと言ったら、「なんだこれくらいのことか奇跡的なことか」と思われる方もありまじょうが、しかし私には、それが実感でございます。

なるべく今日はアットホームな気持ちで、皆さんと一緒に考えながら、お話させて戴きたいと思います。

基本的な三つの感謝

まず私は皆さんとともに三つのことについて、大自然に対してお礼を申し上げたい。その第一は、今日の健康に対してであります。そんなことはそれ程たいしたことではないと思われるかも知れませんが、我々の健康はからだをつくる約五十兆の細胞的生命の調和があつてこそそのことでありまして、この不思議は、進んだ今日の科学をもってしても実はなお十分には説明できないものがあるのであります。たった五十億の人口の世界では、ごらんのとおり毎日たいへんなことではあります。五十兆であります。単位が違います。それ程の細胞生命が集まり、そこに調和があればこそその今日の健康でありまして、まず今日健康でお会いできるということに対して心からの感謝を致しましょう。

第二は、昨日、今日の生命ではなく、三十数億年の歴史を持つ我々の生命に対する感謝であります。我々が人間として生まれてくるまでに我々の前には実に三十数億年の生命の歴史があるのであり、突如として生まれてきた訳では無いのであります。三十数億年というところに、何かばんやりしたところがありますが、実は、この地上にいつ生命が発生したかということについては、まだ確実な学問的証明がないのであります。そういうことで三十数億年といいますが、大体最

近の研究では三十七～八億年くらい前のようでありまして、とにかく今日の我々の生命には三十数億年の生命の流れが背景としてあるのでありまして、こうして見ると我々も全く不思議な存在であります。

第三は、人間における深い思考力に対する感謝であります。宇宙はまだよくその広さも分からぬほどの広い場ですが、この広い宇宙の中でも、深くものを考え得る能力を有するものは、ただ人間だけであります。

この点においては人間は、全地球はもとより、全宇宙よりも重く、かつ尊い存在であります。我々はなるほど世界人口の四十億余人の一人であり、日本人口の一億二千万人の一人であります。そういう見方だけでは実はあまりにも粗末でありまして、我々は宇宙の中で深くものを考え得る唯一のものとして全地球、全宇宙の中で最も尊い存在であります。私もそういう人間に生まれて来たということにまずもって皆さんと共に感謝し、これからは、わからん、わからんだけでは話は進みませんから、少しわかったようなことも申しながら話を進めましょう。しかし、正直なところ、生命の全歴史を通して自分自身を知っておるといふ人間は一人もありませんし、またそれは不可能であります。

今申した三つの不思議、すなわち今日の健康の不思議、長い人間的生命の不思議、および人間の思考力の不思議など、どれ一つをとっても驚嘆に値するものばかりですが、我々は皆そうしたものを持っている最高の存在であります。我々の誰一人をとっても、いい加減な粗末な存在ではないのであります。粗末に考えている人はありまじょうが、粗末な人間というのはないのであります。忙しい世の中にこんなことばかり考えてはおれんでしようが、しかし時には静かにそういうことも考えてみるということも、私は人間としては大変大事なことだと思ひます。

この部屋に入って来て私はしみじみと感心しているのであります。それはいかにも心の静まる落ちつきと広さがあることであります。広い部屋はあっても、こうしたゆとりのある部屋は少ないのではあります。今日ゆとりのあるこの部屋で静かに人間を考えられるんじゃないかと、そんなふうに感じているのであります。

私は新潟県の人であります。新潟市から二十キロばかり、初めは信濃川、次いでその支流の中之口川に沿って上った所ですが、私の生まれた当時は大変へんぴな貧しい村でありました。ありがたいことに今では新潟県でも模範村になっております。この頃になってしみじみ思うことは、貧しいけれども大変心の暖かいよい村に生まれたということです。この村の人々、いやこの地方の人々はよい人々で都の人から見るとちょっと足らんのではないかと思う位お人好しであります。今でもそういう傾向があります。だが若い時には私なども何度も、もう少ししっかりした所に生まれれば、もっと賢い人間になれたんじゃないか、どうも変な所に生まれて大分損をしたなあなどと考えていた時があります。しかし、今となっては、しみじみと何と素晴らしい所に生まれたなあ、この貧しさとお人好し、これは何物にもかえがたいすばらしさと思っております。

幼稚園などというものはもちろんありませんでしたが、どこの家に行っても、御馳走はないが、にぎり飯くらいは皆よるこんで食べさせてもらいました。そういう村の三十軒ばかりの山王という字が私の故郷であります。そういう字で育った私などには子供の頃から、なんとおなしに世の中には悪い人間などはおらぬような感じでありまして、これは理屈ではなく、直感であります。そんなふうなところで生まれ、貧しいということで、ものの有難味がわかりました。私どものところでは、昔はほとんど足袋なんかはいたことはありませんが、シャツやズボンでもお正月とお盆の時にちょっとましなものを着せてもらいましたが、ふだんは全くつぎはぎだらけのものだけでありました。しかし、その着物は母親が織ってくれたものであります。その頃は有難いとも思わず、妙なものを着せられるなあと思ひましたが、いまごろになってやっとその有難味がわかり、貧しさということも、何とか生きていければ有難いものだなあとしみじみ考えておるのであります。

曾我量深先生、東本願寺の曾我先生とは同じ村で、同じく名誉村民であります。曾我先生はお亡くなりになりました。曾我先生もやっぱり一番基本的な性格といえれば誠実なお人好しということで、いい加減に物事をごまかすなどということのできなかった方ですね。とにかく真面目であった。しかし真面目などという言葉は、言葉としては何となく窮屈に聞こえるが、真の真面目さには窮屈などということは入らぬのであります。

飲んでも遊んでも、やっぱり真面目な人は真面目なのであります。その辺のところは今日はゆっくり話をする時間はありませんが、笑うことができない人、冗談が言えないような人は、自らの性格の狭さを考えなければ、本当に世の中の望ま

しい存在ではないと思うのであります。どんな時にも冗談も言えるが、大事なことは絶対に命がけでやるという、そういうものであってこそ私は真の真面目ということが出来るのじゃないかと思うのであります。

われわれはどこにおるのか

さて我々は一体どこにおるのかということでありまして、地球におるといことは問題ありませんが、その地球が一体全宇宙のどこにあるのかということになると、まだ学問的にはっきりわからん点があるのであります。この宇宙全体の広さはまだ正確にはわかりませんが、そこには大体約百億位の宇宙があるそうであります。その中で我が地球があるのは、その中の銀河系という宇宙であります。百億位というのは、まだ正確にはわからんのであります。まだ、これだけ学問が進んでも宇宙の広さが全体としてどれ位かということも、はっきりわからんのであります。大体今日のところで学問的に確かに知り得る天体の極限は、四十五億光年だそうであります。一光年というのは、一秒間に三十万キロ走る光の速度、すなわち、一秒間に地球を七回り半する光の速度をもってして一年かかる距離、具体的には約九兆四千六百億キロだそうであります。そういう光の速度で四十五億年、私にもピンときませんが、四十五億年かかるところにまで天体があるということが今日では学問的にはっきりしておる限界だそうであります。しかしそこが宇宙の真の限界ではないのであり、学問的に測定法が進めば、まだどこまでいくのかわからんのであります。ずいぶん学問が進んだようではあります。また宇宙の広さも正確にはわからんのであります。まあそういう中でも我が地球があるのは百億の宇宙の一つである銀河系であります。その銀河系の中には太陽が二千億位あるそうであります。

そのひとつの太陽が我々の太陽であり、その太陽の周囲に九つの天体、すなわち水星、金星、地球、火星、木星・土星、天王星、海王星・冥王星があります。近頃はロケットで土星まで行ったり、火星まで行ったりあるいは金星まで行ったりしておりますが、この太陽とその周囲にあります九つの星を太陽系と呼んでおり、太陽から見てその三番目にわが地球があるのであります。

ところで生物については結論的に申しますと、太陽系の中でも高等な生物は地球以外にはいないことがわかってまいりました。しかし、極めて下等な生物が他の天体にもおるかおらぬかということは相変わらず問題であります。だが、ものを深く考え得るような生物などはもう地球以外にはおらぬということはほぼ今日断言できるのであります。

そう考えると、改めて全宇宙の中でも、この地球のすばらしさ、人間のすばらしさを思わずにはおれません。

まだよくわからぬ宇宙の中では、銀河系は比較的良好にわかっているのであります。よくわかっているといってもわかっていない方が多いのであります。大体直径十光年、厚さ八千光年位の両凸面体で、そうちっけなものではないのです。そんな銀河系の中でも比較的良好にわかっているのはいわゆる太陽系であり、この太陽系は前述した如く、九つの天体からできており、太陽から見て三番目に地球があり、我々がそこに住んでいるのであります。この地球にはさらに様々の植物や動物があり、また山あり川ありで、誠に変化に富んだところで、全太陽系の中でも地球が最も素晴らしいのであります。

三つの生命

ところでそこで住む生物の長者たる人間を見ると、人間の生命には三種の生命があります。すなわち人間的生命には、植物的生命、動物的生命、精神的生命の三つであります。すなわち人間的生命は三階建てで、一番下に植物生命があり、その上に動物的生命があり、その三階に精神的生命があります。この精神的生命は狭い意味の人間的生命であります。植物的生命というのは植物の生命という意味ではありません。植物的生命というのは学問上の専門語で、植物的作用を営む生命という意味であります。植物的作用というのは、植物が生きていくために必要な共通の働きをいうのでありまして、例えば、呼吸であるとか、養分をとるとか、あるいは養液(例えば血液)を運ぶ循環作用とか、成長とか、というような働きをいうのであります。人間になりますと、これらはすべて肺とか、胃腸とか、心臓などの内臓で行われますから、植物的生命は一名また内臓的生命ともいっております。この植物的生命はもちろん、動物でも全然我々が知らない間に、誠に不思議なことでありますが、特別の神経の働きで行われているのであります。例えば心臓がいかに働いておるかということはお互いにわからんことでありますが、知らぬ間にうまく動かされているのであります。もしこれを自分の

工夫で動かすのであれば大変ですね。とてもものを考えるなどというヒマはなかろうかと思えます。また、肺にしても、呼吸にしてもそうです。肺をいかようにしようかは誰も考えていないが、自然に呼吸がうまくできるようになっているのであります。胃腸もしかり、腎臓またしかりであります。

生きるには、養分とか、空気をからだに与えることは必要であります。それから先は万事あなたまかせでありまして、我々自身は何も苦勞をしておらないのであります。すなわち生きるということは、自分が意識的に工夫をして生きておるのではなく、生まれる時与えられた大自然の不思議の力で生かされておるのです。科学的にも生きるということは正に生かされることであります。不思議といえば誠に不思議であります。こういう不思議は、何故そうっておるかということは科学といえども充分説明ができず、元の元の力については言明できないのであります。この辺になりますと、やはり科学と宗教の一つの接点があると思うのであります。

動物的生命というのは、これは動物が主として本能的に筋肉や骨を使って飛んだり跳たりするような生命でありまして、動物の生命は二段構えになっておるのであります。すなわち動物の第一生命は植物的生命であり、第二生命が動物的生命であります。動物的生命は、あまり観念的に頭で考えたりせず、主として本能的に働くような生命であります。植物的生命と動物的生命は大体、肉体的生命であります。しかし精神的生命はいよいよ難しいことになります。

精神的生命が、肉体的生命を離れて、独自の生きることができるといふ問題は宗教では大きな問題だと思えますが、私は科学をやった人間でありますから、やはり精神的生命は肉体的生命に直結するものだというふうにごく原始的に考えております。

脳について

動物的生命は三階に、植物的生命は一階にありますが、この二つをひとまとめにして通俗的には肉体的生命と言ったり、広義の動物的生命と言ったりしますが、第三階の精神的生命はこれに対するもので、ものを考える生命であり、人間を人間たらしめるもので、狭義ではこれだけを人間の生命ということがあります。これは人間において、あらゆる動物にすぐれて、特にいわれるものであります。人脳は非常に複雑で、とても一時間や二時間でくわしく説明できませんが、人脳こそはあらゆる動物の中でずばぬけてよく発達しておるものであります。

さらにくわしく申しますと、脳の中でも人間の脳で特に発達しておるのは、脳の上部であり、すなわち脳の新しい部分であり、さらに具体的に申しますと、大脳の表面で専門語では大脳皮質と呼んでいる部分であります。そして、大脳皮質から下の部分を全部ひとまとめにして皮質下脳部と呼んでいます。皮質下脳部は原則的には魚の脳も人間の脳もそう違いはない部分で、この皮質下脳部はさっき申しました植物的生命とか、動物的生命を世話する部分であります。ところで、精神的生命、すなわち我々の精神作用を行うのは大脳皮質で、この大脳皮質が特に人脳では発達が良いのであります。

人の大脳皮質には、エコノミーという人が計算したのであります。大体百四十億の神経細胞が、オギャーといって生まれてきた時からすでに用意してあるのであります。何たる不思議でありましょう。誰がそのような素晴らしい宝の山を与えてくれたかということは科学でも答えられないのであります。

科学ではそうっておるといふことはわかりますが、大自然などというものは科学が進めば進むほどいよいよ絶妙で、むしろわからなくなるのであります。つまり科学が進めば進むほどいよいよわからぬほどの不思議がたくさん出てきて、簡単には説明できなくなるのであります。

たとえば、秀才とか鈍才などは生まれながらにして違うのだらうといひますけれど、どうも違わんのであり、この違わんということは、だんだんはっきりしてきています。

それは世界史の中に多数の例があります。

若き日の鈍才も努力次第で世界的巨人になったような例も決して少なくないのであります。例えば、生物進化論のチャールズ・ダーウィンは優等生ではありませんでした。彼は医者になろうとして医者になれず、牧師になろうとして牧師の資格は得たが、とうとう牧師の職には就きませんでした。そういう親泣かせの子供でありました。しかし、今日では生物進化

論の発見者として、十九世紀における世界最大の巨人の一人として評価されておるのであります。大脳皮質の百四十億の神経細胞は生まれた時すでに用意されておりますが、すぐにその全部が活動できるような状態にはなっておらず、部分によって成熟度は違いますが、十歳位になるとほとんど本質的には大人とかわらない位発達してくるのであります。一般の人々は、とかく先天的に優劣があるように考えるが、どうも各方面から観察すると、問題はむしろ、その後の勉強の態度、努力の大小にあるようであります。大事なことは、楽しんで頭を使うか使わんかということで、義理で点数をとる位では、まだ充分真の実力発揮にはならぬのであります。遊びでも何でも結構であります。遊びながら考えるというような子供なら将来は伸びるのであります。頭をよくするには、ただ他人の真似をして覚えるだけじゃなくて、考え出すということが大事なのであります。この間、湯川秀樹さんが亡くなりました。湯川さんの頭は多分天才的だから違うだろうということで解剖をしたら、解剖の結果は、調査をした範囲内においてはあまり違ってないのであります。目方が千三百六十グラム位であります。日本人の脳重はやや重く、平均千三十六～千四百グラム位であります。目方などをみた所では平均人ですが、しかし重くなければ素晴らしい脳ではないというのは素人が考えることでありまして、日方が普通以下であって、しかも実際には世界的な人もおるのでありますから、ただ重さぐらいでとかやくいうことはできないのであります。

神経細胞の数がいくつあるかということは、すぐ簡単には計れませんから、これから調べられるかどうか知りませんが、湯川さんの所見は、神経学者としては、天才であったということにおいてはちっとも不思議はないのであります。実は神経学的には我々全部が隠れた天才なのであります。これはもし我々が努力して、生まれながらに与えられている可能性を真に生かせばという前提においてであります。皆さん全部がそうなのであります。例外なしに、潜在的な天才たり得る可能性があるのであります。問題は百四十億の神経細胞をいかに使うか使わないかということにあるのであります。

このことはなかなか、そういっても承知してもらえないのであります。しかし世界史を通して見ると、若き日の秀才かならずしも伸びず、若き日の鈍才かならずしも駄目ではないのであります。チャーチルはご承知のとおり小学校と中学校はクラスのビリでありました。子供の時得意だったのはケンカだけであります。しかし、堂々とケンカをした。弱い者をいじめめるようなケンカではないのであります。陸軍士官学校へ入るのに三年もかかりました。当時、陸軍士官学校が最も入り易いというので受けたのであります。入学はやっと三度目に成功したのであります。しかし三十六歳にはすでに大臣になっています。

どうも秀才にも鈍才にも、いろいろの型があるようであります。要するにいわゆる秀才とは、好んで頭を使ったり、喜んで頭を使うような機会と訓練をへた人であり、いわゆる鈍才とは、本質的に駄目なのではなくて、何か環境とか、機会とか、そういうことに恵まれず、本当に努力ができなかったような人、そういう人々が多いようであります。

湯川さんなども、小学校から大学まで、いわゆる秀才ではありません。また朝永振一郎さんもノーベル物理学賞受賞者ですが、いわゆる学校秀才ではありません。何れも上の方でありますけれども、俗にいう学校秀才ではありません。というのは、点数をとろうというふうには本人も考えなければ、家庭でも考えませんでした。点数なんてものはそれほどのものではないと私も思います。私なども実は高等学校までは型の如く点数を取る勉強をしておりました。が、大学ではそういう勉強はやめました。点数主義の勉強は要するに先生が教えられたことをそのまま覚えたり、暗記するだけで創意工夫がありません。大学では私は点数主義の勉強はやめて、実質主義、実力主義の勉強にかえました。たとえ成績は落ち、落第しても結構だから、私は私なりに読むべき書を読み、独自の最善の努力をしました。そのことについては、あとで時間があれば話しますが、そのため大学一学期はノイローゼになったりして、大変困ったのであります。しかし、とうとうわが主義を通しました。

人の大脳表面には百四十億の神経細胞がありますが、今までの研究ではいわゆる天才といえども、与えられた百四十億の大脳皮質の神経細胞を全部、完全に使い果たしたような人はまだ一人もなく、天才といえどもまだ使わないような部分が残っておるそうです。すなわちまだ百四十億の神経細胞を完全に利用したという人間は天才を含めても一人も

の地上にはいないというのが、今日までの研究結果であります。大体、四割位使えば何とか簡単なことはできそうですが、この辺の研究になりますと、まだ研究そのものも充分ではありませんから、詳しいことはわかりません。それと、知能検査というようなものも本当に能力の上等、下等ということを一義的に決定はできないのであります。これは、はっきり申しておきます。

人間の仕事にとって何が一番大事かというならば、やるべきことに生命をかける情熱とか忍耐でありましょうが、情熱とか忍耐なんてことは知能検査にはよくでないのであります。忍耐とか情熱、これはもうはっきりということではできますが、もし本当に生命をかけるような情熱を若者がもつことができるなら、たとえ学校の点数が悪くとも、これはたいしたことあります。湯川さんなどという人も、いわゆるガムシャラな強さはないのであります。しかし、自分がやろうと思った事に対しては、全く生命をかけた情熱を持った人です。朝永振一郎さんもそういう人です。私は二人ともよく知っておりますが、朝永さんにしても、湯川さんにしても良い環境に生まれております。両方ともお父さんは京都大学の先生であります。しかし、ここで一言しておきますと、湯川さんなどは、父親はあまり湯川さんの生き方には賛意を表していません。父親とは、少なくとも人生のある時期においては、ある程度の内面的な葛藤があったようであります。しかし、その葛藤を静かになくさめてくれたのは湯川さんの母親であります。反対があっても我が道を行かれた湯川さんは偉いと思います。そして、その母親も偉いと思います。

若い時から湯川さんなどは勉強せよなどと説教されず、楽しんで本をみておればよく、そして、本についても、そばの人から本に書いていないような面白いことまでも教えてもらえる環境でした。つまり遊びの中にも勉強がありました。遊ぶということが勉強とまるで違うという粗末な考え方では、やっぱり伸びるべき人も伸びないと思います。遊びの中にこの学ぶことの喜びを与えることができれば、これは素晴らしいことだと思いますが、これにはしかし、親の深い修練がいります。

今までお話ししたように、人間の生命には、植物的生命、動物的生命、精神的生命というようなものがありますが、しかし、その中で人間としてもっとも大切なものは、もとより精神的生命であります。いかに身体が丈夫でも、それだけでは人間としてのもっとも優れた人というわけにはいかないと思うのであります。

しかし、同時に肉体的生命が充分でなければ、なかなかこの精神的生命に心を入れてやるということもできないので精神的生命を充分伸ばすにはやはり肉体的生命も丈夫であることが望ましいと思います。望ましいのは肉体的生命と同時に精神的生命が素晴らしいということであろうと思います。

時間的面から見た命

今までの、肉体的生命とか精神的生命は働きの面からみたのでありますが、今度は時間的面から人間の生命をみることにいたします。

時間的に人間の生命をみますと、個体発生的生命と系統発生的生命とに分けられます。個体発生的生命というのは、これは人間が母親の胎内で受精をして、生まれて死ぬまでの生命であります。平均寿命という場合には、母親の胎内での時間はとり除いてありますが、これは本当は受精で妊娠してから死ぬまでの方が合理的であります。平均寿命はご承知のように日本人はたいしたものでありまして、男は七十三・四歳位女が七十八・八歳位であります。まあ七十三歳半と七十九歳であります。これに胎生十カ月を加えたものが、日本人の個体的生命であります。

人の系統発生というのは、この地上に生命が現れてから段々と高等な生物になって、最後に人間になるまでの発生をいうので、系統発生的生命とはそうした地上での生命の出現から今日の人間に至るまでの縦の長い人間の生命をいうのであり、略して系統的生命とも申します。これが先程申しましたように三十数億年であります。

ところでこの二つには実は重大な関係がありますが、これはドイツのエルンスト・ヘッケルという人が発見したのであります。すなわち「個体発生は系統発生を繰り返す」というのであります。これをもっと具体的にいうと、人間は母親の胎内に十カ月ありますが、十カ月のあの間に我々は三十数億年の歴史を繰り返すというのであります。つまり胎児は小さい人間になるのではなく、極めて下等な生物から色々の段階をへて初めて小さい人間となり、これが段々人間の子として

生まれてくるのであります。

輪廻の説などがありますが、これは宗教的な立場からみたので、あまり細かな比較はできませんが、とにかく母親の胎内における十カ月とは三十数億年の歴史を繰り返す十カ月でありまして、その途中ではたとえば鮎と同じ時期もあるのであります。もしその時に生まれてくれば、そういうものは死産で生まれてきます。それは幸いといっていいでありましょう。そのような形をして生まれてきても幸せではありませんから。そのように、母親の胎内十カ月というものは、実は誠に不思議な時期であります。何故しかし、そんなことが起こるのかということは、これも学問的にはそのプロセスはわかりませんが、本質的なことはわかりません。

まあよく胎教などと申します。胎教というものを学問的に充分裏付けるだけのものは今までのところはありません。ありませんが、何か関係が、たとえば母親の精神的態度というものが何らかの意味で子供に影響を与えるのではないかという可能性は学問的にも考えられますが、その決定は明日の問題であります。

とにかく人間はその背景に三十数億年の歴史があり、しかもこの三十数億年の歴史を母親の胎内で繰り返して、初めて無事に生まれてくるのであります。思えば大変な事です。そして指は五本、手足が二本宛などというふうの間違わないのであります。この間違わないという事がどういうことかということは、自然の不思議でありまして、大事なところへくるとみんな自然の不思議になり、わからないのであります。そして、こうした不思議は、実はただ人間だけではなく、蝶についても兎についてもすべて同じことなのです。しかし、これを不思議として考え得るのは人間だけです。

もう一つ大変大事な事がありますが、それは文化の問題であります。近頃は、文化が進んだ、文化が進んだと申しますが、文化には大体二つの流れがあります。すなわち一つは知的な文化、もう一つは情的な文化であります。バートランド・ラッセルは知的文化を頭の文化、情的文化を心の文化と呼んでいます。今日、文化が進んだ、文化が進んだといっておるのは、実はこの知的文化であり、科学的な文化であります。科学的技術の応用などもここへ入ります。この点については、たしかに音に比べたら今日の方がはるかに進んでおります。しかし、もう一つの心の文化、情緒の文化になりますと、感情道徳、信仰、芸術などは皆これに属しますが、決して昔より優れているとはいわれないのであります。これは日本だけでなく、世界的にみても、むしろ昔より衰えつつあるのではないかとと思われる点があるのであります。

今日の間生活には、日々の放送や新聞等が示すように恐ろしいことがたくさん起きますが、これは知的な文化が進んでいるが、しかし、人間生活にとり大事な情的な文化心の文化が劣っておるということでありまして。ラッセルがそういうことをいいたしたのは、今から七十～八十年前であります。当時、イギリスは七つの海を征服して盛んに威張っておりましたが、それに対してラッセルは、「そう威張るな。イギリスの文化が進んだというのは頭の知的文化だけで、心の文化は少しも進んでおらず、人間的には少しも成長しておらないか」と警告を發したのであります。この警告は残念ながら、今日ではイギリスだけでなく、全世界にも通じ、従って日本にも、アメリカにも通ずるのであります。

確かに知的な文化、科学的な文化は進歩し、また進歩しつつあります。けれども人間いかに生きるかという心の面にはどうも大きな進歩はありません。これは情緒の面であります。情緒といえば、喜怒哀楽等はもちろん、これらを動かす道徳や宗教の信仰などもこれにはいるのであります。こういうものはどうも昔より深くはなっておらず、むしろ段々と薄っぺらになりつつある傾向さえあるのであります。この点については現代人は、学問をした人も、そうでない人も等しく反省をしなければならぬと思います。

大体、親はみんな子供が良い子になるようにと望みますが、一体この良い子とは何でしょうか。一流学校へスーッとストレートに入るなんて子だけが良い子ではないのであります。遅れても、良い子は良い子であります。勝手なことをいわせていただければ、私などは小学校から大学までストレートに入ったなどというものには、あまり興味がないのであります。大学の教授として四十年間やった私の経験であります。たとえ卒業が一年や二年遅れても、入学試験に一年や二年しくじっても、そういうことは決してその人間の価値には関係がないのであります。

できる子、できない子

私は、個人的にはいわゆる優等生などはあまり世話をせず、むしろ多く、いわゆる劣等生の方ですが、その人間的に

素晴らしいというものには積極的に応援してきました。

こういう諸君は今ではみな社長、市長などそれぞれに成長しておりますが、学校の成績だけなどでは私は推薦しておりません。遅れた人であろうが、間違いを起こした人であろうが、とにかく本質的に良いものを持った人間、誠実でやる気がある人間、大事な時に逃げ隠れない人間、責任と情熱をもってことにあたる人間、そういうようなことを基礎にして推薦してきましたが、まあ幸いにしてほとんど一人も予想に反した人はなく、みなそれぞれ成長しております。みな、やれば、それだけの力を持っている人であります。

私はいつも、できる子、できない子などという時には、その上に「いわゆる」ということばを付けます。それは優等生とか劣等生とかいっても、多くは本質的の差別ではなく、やる気があるかないかというような結果として表われる現象的のことが多いからです。私にも六人の子供がおりますが、半分はいわゆる秀才、半分はいわゆる凡才であります。身体の肥えた私に似たのはみな凡才であります。私の祖母に似たやせ型の方は大体、いわゆる学校秀才であります。ただしこのやせ型の方は性格的に複雑、過敏で、親として大変心配しましたが、しかし、肥えた型の方は性格的には安定し軽挙妄動は全くなく、安心しておりました。私はあまり点数などには拘泥しなかったので、家ではあまり勉強せよなどと言ったことはないのです。勉強をさせたいと思ったならば、子供の好みや心を知って、それに通じるように計ればよいのであります。どうも自分で勉強をしなかった人ほど、むしろ子供には注文が多いようであります。私は自分の子供に対しては学校秀才なんかを望んだことはありません。それよりも、どんな場合にも、どうぞ落ち着いてケチなことはしない人間、伸び伸びと誠実に生きる人間になるようにと願っておりました。幸いに、幸いとしかいいようがありませんが、いわゆる凡才型もみんな無事に伸びてきましたし、また心配したいいわゆる秀才型のも、良い結婚相手を得て、全く見違える程に良くなってきました。全く有難いことであります。

私の子供の一人にこんな子供もおります。スポーツばかりやりまして、高校の時、学校から成績不良につき父兄に出てこいと通達を受けました。二年の時であります。本人は大変心配をして、母とよく連絡をとって、ある晩、私が帰った時恐縮してその書類を私に見せました。私はその時、「何と素晴らしい成績じゃないか。あの位遊んで、なおかつ、この点数が取れるということは、お前の頭はたいしたものだ。だが、この点数には、まだオマケがあるな」と答えました。この子供は先生から大変可愛がられておりました。成績は悪いけれども、性格の良い子でありました。

「お前とこの親父の頭とは本質的には全然違っておらん、あれ位遊べば俺もこんな点数をとるだろう。しかし、ちょっと違うのは、俺は一生懸命学校の勉強をしたが、お前は一生懸命ラグビーの勉強をしている。それもいい、それはそれでいい、ラグビーの勉強もやっぱり人生の勉強だ。だからラグビーをやめるなんてことはいわない。やめなくていい。だが、頭をもう少し大事にせよ、頭をな。」とだけいいました。百四十億の神経細胞があるなんて、そんなことはいいませんでした。そんな時は、とにかく理屈っぽい話ではなくて、子供が素直に受け入れられるように話すべきであります。子供はその時は、今日は親父におこられるだろうと思って非常な覚悟をして、家内と相談して、あまり叱られたら、家内が応援することになっていたんだろうと思うんです。しかし私はお世辞ではなく、粗末な頭などというものはなく、粗末に使えるみな粗末になるが、大事に使えるみな大事なものになると信じておりましたから、「頭を大事にせよ」とそれだけいいました。何も細かなことはいわないのに、本人も翌朝はもう四時から起きて勉強していました。私はその頃四時には起きておりましたが、私の真似をしたのでしょう。あの時、私が人間には百四十億の神経細胞があるなんて説教したら、あるいは子供はくさったかも知れません。この呼吸が、ちょっと大事なところであります。

そういうところにこそ、親の本当の情があると思いますが、感情的に「何というひどい成績だ」なんて馬鹿なことはいいはならぬのであります。学校で叱られてきたことを、もう一度家で叱るなんぞという親がおられたら、今日ただいま反省していただきたいと思います。

学校で叱られてきて、その先生の悪口をいうなんてことは、これはもちろん大きな間違いであります。それはそうだと、先生のいわれたことを立てながらも、子供には、子供がやろうという気持を起こすよう、心深く考えねばならないと思います。

ですから私はいつも家では、いわゆる秀才、いわゆる凡才といういい方をします。兄弟でも兄の方は、いわゆる秀才、弟の方がいわゆる凡才だと、下手をしますと兄を賞めて、弟は駄目だなどと申すことにはなりますが、何たる言葉でありましょう。それは親としては失格ですよ。そんな事をいうような粗末な親で、子供が良くなるはずはありません。子供はみんな良くなる可能性をもっておるのでありますが、それをいかようにしたら良くなるかということは、それは一つには親の仕様にもよるものだと思います。

山下清君、みなさん御存知のとりの精神薄弱者の日本画家であります。彼の成長は式場隆三郎博士との出会いであります。式場博士は日本にゴッホを最初に紹介したひとりで、精神科の医師であります。彼は新潟時代からの私の友人でもあります。山下清君の絵を見て、「日本のゴッホがここにいる。」とって全く感心したのであります。これは単なるお世辞ではなく、本当に感動の言葉で、それからいつも賞めながら、山下君をはげますのであります。だが山下君は精薄児で、それまでは他人からものをいわれる時はもっぱら小言ばかりで、賞められた経験などはないので、式場博士に賞められてもピンとこないであります。だがやがて、式場博士の愛情も通じて、山下君は絵に熱が出始めて、あれだけの画家になったのであります。精薄児でももし燃えれば、あれだけになれるのであります。

山下清君は、私が京大医学部の教授であった頃一度訪ねてきました。そして解剖学の標本をみせてくれというのであります。本人はあまり難しいことは話せませんので、二人の伴を連れてきました。しかし、私は解剖学の標本は学問的標本で、素人にはみせないことにしていると申しました。

しかし、絵の勉強だから是非みせてくれと熱心な願いなので、それでは三十分だけという約束でみせることにしたのであります。ところがたいしたものあります。初め話をしている間は、精薄でありますから、私に向って「大将、大将」なんていっていたのであります。ところが大将というのは、山下清君は人を区別する時に軍人の位で区別していたのだそうで、ついてきた人の説明によりますと、余程の人でなければ山下君から大将とはいってももらえず、この人が大将というのは最も尊敬している証拠なんだそうです。もとより私は初めから気にもかけませんでした。標本室に入って、私はまず人間の胃袋からみせて、これは食物をためたり、こなしたりする所だと説明しました。これを了解するにつき、何度も同じような質問があってやっと分かり、私は初めはちょっとがっかりしました。

ところが、いよいよ分かって絵を書き始めると全然違うんです。精薄の山下君は、俄然天才画家になり、その表情まで変わってきました。本当に顔色まで変わってきました。その厳粛な姿、文字通り燃える姿はもはや精薄の山下清ではない。私は感動しました。ヘレン・ケラーなどは、みんな偉い偉いといっておりますが、偉いには違いはないけれども、その後ろにすばらしい母と同時に、教育者としてあれ程の人はないといわれるサリバン先生がついておられるのである。そういう良き母親、良き師を得て、燃えて、あれだけの人になったのであります。山下清君を思う時、いつもヘレン・ケラーを思うのであります。ヘレン・ケラーも単なる天才ではなく、手話の指から血が出る位やってやって、やりまくっておるのであります。しかも、そこにはいつも、サリバン先生が文字どおり一心同体となっておられるのである。便所に行く時も、食事をする時も、学校へ行く時も、復習をする時も、一緒にいて手話で手伝いをしておられるのであります。そういう先生の魂がヘレン・ケラーを燃やしたのであります。要するに、ヘレン・ケラーの人物は努力の賜物であります。ヘレン・ケラーも山下清も共に燃焼の産物であります。山下清の場合は、おそらくは大脳皮質には百四十億の神経細胞はなかったのだと思いますが、それでも、燃えればあれだけのものになれるのであります。やればできる。本当にやればできるのです。

結局、人生で一番大事なことは、やはり、燃えることであります。興味と誠実さで燃えることあります。

自己との競争

人間はとかく他人とは競争します。しかし、自分自身との競争は誠に粗末なんですね。

大事なことは誠実な心で自分自身と競争して、わがままな自分に克つことあります。

誠実といったところで、自分自身に対する誠実、他人に対する誠実、仕事に対する誠実、社会に対する誠実、物に対する誠実等々いろいろあります。己に対する誠実とは、強い精神的自己が、わがままな本能的自己を抑えて克つようなこと

で、これさえあれば自分が自分に約束したことは生命をかけて必ず守り、まず以て自分との競争に克つのであります。自己との競争に克てさえすれば、もう他人との競争などは大したことはないのですが、とかく人間は、自分が自分に約束したことを破るようでは、他人との競争もだめであり、真の人生はないんじゃないかと思えます。分かったようなことを申しますが、実はこれはなかなか本当には分からず、私も大学一年の時、にがい経験があるのであります。私は先ほどちょっと触れましたように、高等学校までは型のごとく、先生のいわれたことは覚えるような勉強法で、いわゆる学校秀才で、四高卒業の時は、よその人はみんな賞めてくれましたが、私は本当の意味では、いかにそれがつまらんかと感じたのであります。

当時、四高に木村謹次先生という偉い先生がおられました。ドイツ語の先生で、東大の恩賜の銀時計組であります。「大学は時間がありますから、うんと勉強するんだね。」と説教ではなく、しみじみと勉強の面白さと大切さを話して下さいました。

そこで、私も心から一つ大学に入ったら、たとえ成績なんかはビリになってもよいから、本当に本心から満足するような勉強をしたいと考えるようになりました。それを具体的に申しますと、大学は講義に出る、同時に先生のいわれた原書の参考書は必ず読む、そして大学の講義と参考書から私自身のノートを作る、そういうふうにしようと思って大正九年の九月に京大に入るのであります。

ところが木村謹次先生は文学部であります、文学部と医学部とは違うんですね。医学部は、朝早くから夕方遅くまで講義や実習があるんで、なかなか参考書も読むなんていう余分の時間がないんですね。どうも大学では、うまく初めの予定通りには勉強ができず、ついには学校へもあんまり出ず、また原書の参考書も読まず、ついにノイローゼのようになったのであります。そして大学一年の一学期は、もう十二月になる前に郷里の越後に帰りました。雪の深い年でありました。家の人は「今年は早いね」それをいったきりで、別に詳しいことは聞きませんでした。私は家では百五十パーセント位信用されておったのであります。「どうして早いの」などと聞かれたら、こっちも困ったことでしょうが、いっも通り信用しきっており、私も安心致しました。

それでは、毎日雪の野原をマントをかぶって歩きながら、さて今後どうしたらよいのか、いろいろ考えました。その頃はもう大学をやめようか、人生をご免蒙ろうかなどと考えていました。私はちょうどその時二十歳ですが、こんなことは感心した話ではありません。しかし事実そうでありました。

ところが大正九年十二月の十二日、不思議にも全く突然、雪の野原でベートーベンの声を聞いたのであります。ベートーベンの二十五歳の時の自戒の音がドイツ語のまま聞こえてきたのであります。

ベートーベンも音楽家でありながら耳を悪くしまして、二十五歳の時にノイローゼになり、人生を御免蒙ろうかなど思ったことがあるのであります。私がベートーベンの言葉を聞いたのは、ノイローゼの幻聴であります、これは恐らく高校三年の夏休みにロマン・ローランの『ベートーベン』の独訳を愛読したのが、もとになっておるのでありましょう。私は高校の夏休みには、学校のものを読まず、学校以外の古典とか哲学とか伝記などを読んでおりましたから、これは今にして思えば良かったと思えます。

その大正九年の夏休みにロマン・ローランの『ベートーベン』のドイツ語を読んだのであります。ベートーベンはドイツ人です、むしろドイツ語の方がいいですね。それを読んで大いに感動しておったのであります。もちろん、大学へ入ってノイローゼになろうなんて考えませんから、そのために勉強したのではありません。あれ程強情、我慢のベートーベンも二十五歳の時には、ついに生命を断とうかなんていうことを考えたのですが、しかし、さすがに立ち止まりました。その時の自戒の言葉が日記に書いてあるのであります。

「勇気を出せ！ たとえ肉体にいかなる欠点があろうとも(耳が悪くとも)、わが魂は、これに打ち克たねばならん。そうだ、もう二十五歳になったのだ。今年こそ男一人、本ものになる決心をせねばならん。」翻訳すると何であります、原語はもっといいのであります。

“Mut! Auch bei allen Schwaächen des Körpers soll doch mein Geist herrschen Fünf- undzwanzig Jahre, sie sind da, jenes Jahr muss den völligen Mann entscheiden”

その言葉が雪の野原をさまよっている私に晴天の霧屋の如く聞こえてきたのであります。不思議といえば、これほど不思議なことはありません。

妙なもので、私はその瞬間救われました。「そうだ、ベートーベンのようなあの偉大な人でさえも、なおかつ、これほどの苦しみをしておるのである。しかも私は二十歳、ベートーベンは二十五歳である。そうだ、お前のようなボンクラが悩むのは無理からぬ。しかし、やるぞ、必ずやるぞ。」ということで、高等学校を出る時に私が私に約束したことを実行するよう、もう一度覚悟を新たに、その年の十二月の内に準備をして、翌年大正十年一月から毎朝二時に起きて実行しました。二時に起きて、大体夜は十時頃までであります。予定の進めぬ時はその日の予定がすむまでやりました。

講義に出なければ試験を受けさせん、なんていう先生もおるので、そういう講義には出ましたが、そうでない先生のところは講義には出ませんでした。

一月から六月までに約三千頁の原書の参考書を読んで自分のノートを作って、とうとう試験を受けたのであります。生理学に石川日出鶴丸博士という教授がおられましたが、その先生の試験の時に、私は正直に答案の初めに「私は先生の講義は出ていなかったが、答案は先生が指摘された 中明〔一&一〕の参考書によって書くから、先生の説と違うところがあったら、後の口頭試問の時に教えていただきたい。」とお願いをしておきました。

ところが先生は偉い方で、「講義に出るとか出ないとか、そんなことは第二義的である。とにかく君の答案は実によく、百五十点は表向きないから百点だけれど。君は実によく勉強しておる。」といって賞めて下さり、試験も通り、また自分との約束も果たしました。しかし、もし先生が「なんだ、そんな勝手な勉強法は駄目だ」といわれたら、私も腐っただろうと思うのであります。石川先生が「君は実によく勉強しておる」といって下さって、私は勉強にさらに新しい勇気を得ました。先生のことをお話するなら、まだまだたくさん優れた先生はおられますが、今日は時間がありませんので申しません。

自分をごまかさないということは、大事なことです。出世をするとか、しないとか、そういうことじゃない。愚かなようではありますが、やっぱり本当に人生に一番大事なものは、誠実さをもった息の長い努力をすることです。他人との競争はしますが、自分との競争はすぐ捨てるような生き方では、いけないと思います。損をしても、しくじっても、やっぱり自信をもって誠実に我が道を行くのが最もよいと存じます。どんな場合にも、自分を粗末にはしてはなりません。

なお、他人から悪口をいわれて、びっくりするような粗末な自己観察ではいけません。

他人から悪口をいわれて、「それは、もっともだ。それどころではなく私にはもっと他にたくさん欠点がある」というぐらいにならねばならぬ。正直に言って、私は私の思わぬ悪口なんていわれたことはありません。私は私自身には、他人がいうよりはるかにたくさん欠点があることを知っております。なかなか人間としての真の成長はむづかしいものであります。

年をとることは簡単ではあります。私もいつのまにか八十一歳になりました。別に苦しまないで八十一歳になりました。しかし、本当にお前は大人になったかといわれますと、残念ながらなかなかイエスとはいえません。大人になりたいと思って努力してきたことは確かではありますが、残念ながら、なかなかイエスとはいえないのであります。

しかし、これからも余り悲観をせずに、少しでも本当の大人になりたいと思います。

しかし、この言葉と矛盾するようではありますが、真の意味での完全な人間などというものはまだないのではないのでしょうか。釈尊といえども、キリストといえども、自ら完全と考えられたでしょうか。

しかし、これらの方々が何れも素晴らしく、史上最高の人であり、超人間ともいべき存在であることは疑いありません。

現実的に人間を考えると、あらゆる機会を通して間違いなく歩むということは、なかなか容易ではありません。しかし、現実の自分も大事な人間であります。私なども不完全きわまる人間であります。しかし、とにかくとばとばしながらも余り大きな間違いをせずに、何とか今日まで生きてきたということは大変なことで、私は近頃この乏しい自分に対して、乏しいながらそのまま拝みたいという気持ちになりつつあるのであります。

誠に一見矛盾をするようなことを申しますが、しかし、なかなか完全な人間がないという自覚と、不完全のままで自らをも拝むということは、決して真の矛盾ではないと思います。

何としても人生に大事なことは、人間があるがままで幸福であるためには、より深く考え、より深く感謝を知ることです。人間はいかように社会的地位を得ようと、また智者になろうとも、感謝という心なくして決して真の幸福者にはなれないと思います。

先程申しましたように、私もすでに八十一歳になりましたが、相変わらずとぼとぼ歩いております。どうも自分が考えたような大人にはなっておらんのは確かではありますが、若い時と違って、今は社会にも、人様にも手を合わせるのみならず、愚かなままの自分にも、不完全なままの自分にも手を合わせてお礼を申し述べたいような気持ちであります。

いろいろの事を申しあげました。言葉でいうと矛盾のようなことも申しあげましたが、その辺のところは、どうぞひとつゆっくりお考えください。

自信 自愛 自尊ということ

お早ございます。今日ここに二十七名の新しい社員を迎えることは、皆様と共に私どもとしても、たいへんうれしいこととあります。同時に、これはまた新学社にとっても、新しい力を加えて将来に向かうということとありまして、たいへん力強いこととあります。

実は私はさきほどから二十七名の方々を、一人一人じっくり眺めておりましたが、有難いことに、皆さんとても元気で素直な方々であるようにお見うけいたしました。名前もいま全部覚えたかと言われますと、それはとても覚えておりません。しかし、そういうことよりも、皆さんが、今日元気で新入社員としてここにおいでになったということを心から喜んでおるのであります。

初めはいろいろと不安な点もあるかもしれませんが、私は実は財界人でも何でもありませんが、ふしぎな因縁でこの一員として、もうかれこれ二十年にもなるかと思いますが、私自身非常に感動しておることがあるのであります。それはこの社には、よそには見られないような温かさや誠実さがあることとあります。

今日はこの場には見えておりませんが、あそこに「慎之莫怠」という額があり、終わりに保田典重郎書と書いてあります。この方は、実は会長さんであります。たいへんすばらしい方とあります。この新学社は、佐藤春夫先生が総裁として、創立の初めから精神的に一本の柱としてお加わりになっておったのであります。会長さんは佐藤春夫先生の高弟のお一人であります。

私は、佐藤先生には、ただ一度宴会の席で会っただけであります。しかし妙なもので人間には、話をしても通じない人もありますけれども、話をしなくとも通じる人もあるのであります。そこが人間のふしぎなところだと思うのであります。私は、佐藤先生とはちょっとお話をしただけなのに、先生からは命の限り忘れることのできないような深い印象を受けたのであります。

佐藤先生は、あまり回数の多いほうではありませんが、実は私も、そう回数の多いほうではありません。しかし、私はその側におるだけで終生忘れ難い感動を受けたのであります。ふしぎなことに、佐藤先生も同じく感動しておられたとのことであります。

全く、これはすばらしい出会いで、お互いに男ばれをしたわけとあります。あとで聞きますと、佐藤先生もお帰りになって、そういうことを奥さんに話しておられたそうとあります。その話を聞いて、私はさらにありがたいやら、うれしいやらで一杯でありました。いつか、また時を得てゆっくりお話をしたいと思っておりましたが、何ともうそれが最後で、先生はその後間もなくお亡くなりになられたのであります。

私にも、永いこと知り合って互いに尊び、互いに気を許している人も決して少なくはありません。しかし、ただ一回お会いしただけで、あのくらい強い印象を受けた方はほかにはないのであります。大きな落ち着きのある温かさ、しかも、それがただの温かさではなく、そこには何かすべてのものに生命を与える、燃えるものがあるのです。何たるすばらしい愛情であり、深い知性でありましょう。

私は、大体一週間に一回ここへきて、皆さんとお会いして、皆さんと共に話をしたり考えたりしておるのでありますが、いつも、私がしみじみと感心しているのは、社長はじめ皆さんによってつくられておるこの会社の空気です。まあむずかしいことばで言えば社風とでも言うのかもしれませんが、どうもありふれたことばで申しますと、むしろ味がなくなるように思われます。しかし無理に、二三口で言えと言われれば社風とでも言うほかはないのでありましょう。

特に私が、今日ここで強調しておきたいことは、皆さんは今日から私が感心しておるこの社へ、社員としておはいりになるんだということでもあります。皆さんは今日から、すべてのものに生命を与える、温かさのある新学社の社員だということでもあります。皆さんは、人に対し、仕事に対し、誠実である限り、何の心配もないのであります。ただ忘れてはならぬことは、この社風は誰がつくったというものではなく、はじめからこの社の建設に協力された佐藤先生、保田先生、奥西社長などを中心として自然にできあがったものであり、その後この社のすべての人々の力で段々とかたまって来たものであり、新入社員の皆さんも今日からこの社風作りに力を出してもらわねばならぬということでもあります。今日も私は感心しておるのでありますが、しかし今日の状態だけでよしいと、われわれは満足をすべきではなく、よりよくなることはいかによくなってもいいのであります。私は、個人でも会社でも、もうこれでよいなどと言うべきものではなく、人生は最後までが努力だと思うのです。ただ大臣になったからもうそれでよいなどという見方は非常に粗末なので、大臣になってもつまらぬ人もおれば、たとえ日一屋いをしていても偉い人は偉いのであります。

私は、この社風の中には、そういうふうな人間を人間として見、人間として拝むというふうな気分も含まれていると思うのでありますが、そういう意味で皆さんは安心をして、社員としての生活をはじめられたらよいと思います。

それは今後同時に、ただ社員としての仕事のみならず、人間としての豊かさを求めるということにもなります。これは年齢を問わず、われわれのすべてに大切なことであります。私などは年齢的にはすでに老人でありますけれども、いまもって欠点だらけで自分自身には満足できません。欠点だらけだという自覚は若いときは、誠に苦しく、ひどい神経衰弱になって、もうこの世をごめんこうむろうかと思ったこともありますが、年をとった今日では、欠点の自覚は自覚として持ちながらも、世の人々に許されて、今日一日、無事に生かさせてもらっておるということに、心から感謝して、日々よりよき人間へと祈りながら、人生を歩いておるのであります。

この社風というのは、会社の規則にもどこにも書いてありません。書いてないところがまた私はいいと思うのであります。第何条、何々すべしというのではなくて、みんなの力で自然に生まれてきて、しかも今日もお成長しつつある社風であるところに、実に意味があるのであります。書いてもなければ、規則でもないからこそ、いよいよ意味があるので、社員たるものはますますその気持ちになって、よい社風をつくりあげねばなりません。これはみんなの会社であります。そういう意味で、そういう人間として伸びることにおいて、皆さんは、どんな先輩にも遠慮はいらんののであります。

私もこの社の社風なんて喋るのは、今日が初めてでありまして、もし訂正すべきものがあれば、あとで訂正をいたしましょう。私がこの社で感心しておることは、社員同士がみんな信じ合い、愛し合っておるということでもあります。そこに人間的な誠実さがあります。私は、これは皆さんがこの社の誇りとしてお持ちになってよいことだと思えます。大きな会社は世間にはいくらありますが、おれの会社には心がある、誠実さがあるという誇りのもてるものは少なく、そうした会社の社員たることは人間として大きな喜びだと思えます。しかし、そうした社のよき社員であることのためには、皆さん一人一人が人間としての成長をめざさねばなりません。それはどういうことかと言えば、いま申しましたことを繰り返すことになるかと思えますが、特に人間的成長にとって大切なことを、一つ二つまとめてお話しいたしましょう。

自信

第一に、最も大切なことは、みずからを信ずることです。しかしこれは容易ならんことでもあります。いかにも私は、わかったようなことを言いますが、おまえはそれなら若いときからみずからを信じてきたかと言われると、信じようと努力はしましたが、しかし、迷いのほうが大きくて、とてもそうはできませんでした。

あそこにも、ここにも人はたくさんおりますけれども、人こそは三十数億年の生物史の頂点に現われたものであります。

すなわち、われわれは三十数億年の生命の歴史の中で、一番最後に、最も高等な生物として生まれてきたのであります。しかも人間にはその特長として、考えるという能力があります。ほかの動物にも簡単な感覚、例えば痛いとか、痒いとかいうようなことはありますけれども、深く考えるなどという能力はないのであります。この思考能力は、三十数億年の歴史の背景をもった人間だけに与えられておる能力であります。

しかも、ありがたいことに、すべての人間には、自分自身でも気がつかないような、ほとんど無限の可能性が与えられておるのであります。能力ではなく、可能性でありますから、努力をせねば能力にはならないのであります。思考作用の本部は脳の表面にあるのであります。そのために、脳の表面にはおよそ百四十億もの神経細胞が考えるために用意されておるのであります。いままでの研究によると、どんな天才の脳でもまだ利用されぬ神経細胞、すなわち、使われないままに死んでいく神経細胞があるそうであります。人々は簡単に、できる子とかできない子とか申しますが、三、四歳ぐらいからじょうずに指導をされて、百四十億の神経細胞を使うことになれば、ほとんどすべての人々が自分でもわからんようなすばらしい能力を発揮できるはずであります。

可能性というのは、やればできる、努力をすればできるようになることでありまして、能力そのものではないのであります。どんな人も生まれながらにして能力を与えられておる人はなく、みな可能性として与えられており、これを努力によって能力に変えるか否かで人間の優劣がきまるのであります。

できるとかできないとかというのは、換言すれば、可能性をどのくらい能力に変えるか、否かということであります。

諸君、今日入社された皆さんは、まだ皆若いのでありますから、無限大の可能性も、まだその九割以上は残されておると思いますが、どうぞ、自信をもっていただきたいと思ひます。そういう意味では、おれはつまらんもんだとか、だめだとかいうふうには考えずに、皆すばらしい可能性を持っているということをも忘れないで下さい。今日からやるんだという覚悟と実行さえあれば、必ず皆さんの将来は明るいと思ひます。

信じるということ、みずから信じるということはなかなか簡単なことではありません。私もわかったようなことを言っておりますが、小学校の四年の時に一回、中学の三年の時に一回、大学一年の時に一回、激しい迷いの時があり、大学一年の時は蒸発を考えたような時もあり、決してみずから信じるということは口で言うほど簡単ではありませんが、絶えざる努力によってやっと難関を通りぬけて来ました。どうぞわれわれ人間には無限の可能性が与えられておるということは忘れないで下さい。これは長い学問的研究によって到達した結論で、決していい加減のことを言っておるものではありません。

しかし、あくまでも可能性でありますから、努力をしなければ能力そのものにはならないのです。人生の勝負は、一に努力、二に努力、三に努力、ともいうことができましよう

自愛

第二に自己育成に大切なことは、みずからを愛するということであります。これはいわゆる利己主義とか、エゴとは違います。自分というものには、大別して、小さい自分、小我と、大きな自分、大我とがあります。小我とは動物的な自分であります。本能的で深く考えず自分勝手にやるような自分であり、いわゆる利己主義なんていうのは、そういう小我の自分であります。大我とは、深くものを考えて、衝動や本能を抑えて、やるべきことを教えてくれるような自分であります。

利己主義や衝動的な生活は小我の産物であります。ほんとうに自己を愛するとは大我を愛することで、いかに生きるか、人間としていかに生くべきかという場合に、わがままな小我を抑えて退しく理想に向かってのびてこそ、真に正しい自己愛というべきであります。これも口で言うほど簡単ではありません。しかも、それは決して若いときだけの問題ではなく、いくつになっても、やっぱりむずかしいことあります。自己を愛することは非常に大事だが、それは動物的な小我を愛することではなく、深く考えて人間として立派に行動する大我を愛することあります。

自尊

第三に、もう一つ大切なこととして、みずからを尊ぶということを述べたいと思ひます。われわれは今日も元気で生きて

おりますが、これはたいへんなことであります。いかにも自分の力で生きておるようであります、それはまあ自分の力もあるにはありましようが、決してそれだけではありません。皆さんの中で、いま呼吸に必要な肺臓の働きを自分で調節しておられる方がありますか。胃袋の状態をいま自分で調節しておられる方がありますか。腎臓しかり、心臓しかり、これらはみな、われわれの知らない間もうまく働いてくれ、そのおかげで、われわれが生かされておるのでありまして、われわれが工夫をして生きておるわけではないのであります。

しかも、ふしぎなことに、われわれの生命は、俗に考えるように決してただ一つの生命ではないので、実は、いわゆるこの一つの生命は、凡そ五十兆ぐらいの小生命の集合体であります。すなわち、一人の人間は五十兆ぐらいの各種の細胞からできておりますが、これらの細胞はそれぞれ小さな生命で、それが全部集まって共同作業を行っておるのが人間一人の生命であります。したがって私どもの今日の健康があるのも、五十兆の生命協同体に望ましい調和が保たれているからです。五十兆です。世界の人口は約五十億であります、その一万倍ぐらいの五十兆の細胞の間に、どうしてうまく平和関係が成り立つかということは現在でもよくわかりません。わからんというよりも、まだ学問がそこまでいってらんのであります。

実は、たった一つの細胞の構造や働きについても、世界のどこにもまだ完全にこれに答え得る学者は一人もおらんのであります。ノーベル賞をもらったといってもその働き的一部分、あるいはその構造の一部分だけを明らかにしておるだけでありまして、たった一つの、五十兆の中のたった一つの細胞の働きさえもまだ完全にはわからんのであります。したがって、そういう細胞が五十兆も集まって、それがうまくまとめられて、どうして今日の健康があるかということは、たいへんなことであります。

あそこにもここにも人はおる、なんだ人間なんてたくさんおるじゃないかといいますが、その中味の生き方を見ますと、なるほどたくさんおるが、その一人一人は現在の最高の学問をもってしてもわからんほど複雑微妙なものであります。そういう生命を与えられて生きておるという自分を思いますと、やっぱり自分を拝み、自分を尊ぶということも大変なことだと思います。これには、めんどろな理屈は第二として、生きるということは生かされるということだということを知ることです。生きるというと、いかにも自分の工夫で生きておるようであります、少なくとも原始的生命を生きるということは、むしろ生かされるということで、自分の頭の工夫ではないのであります。

まことに、生きるということ、そのことがふしぎでありまして、動物はそんなことは何も考えないでしょう。そんな考えてもわからんことは考えんほうがいいじゃないかというのも理屈かもしれません。しかし、せっかく頭を与えられたんだから、たまにそういうことを考えてみるのもよく、そうすると、なるほどお互い文句を言っておるが、今日一日生きるということ自体が一大奇跡だと感謝をせずにはおれなくなるのであります。

この感謝は、おのずから自分を尊ぶということにもなるかと思うのであります。信ずるとか、愛するとか、尊ぶとかいう気持ちは、自分に対してのみならず、むしろ人に対してはより重要かもしれませんが、しかし、それにはまずみずからに対してそれだけのことができなければ、他人に対してもまねはできても、心からのそういう感謝はできないと思うので、まず何よりも自分自身に対してそうした心を持ってもらいたいと思うのであります。

どうぞ、まず皆さん自身が一人一人、人間として伸びていただいて、その上で互いに社員として手をつないで、信じ合い、愛し合い、尊び合って、いよいよこの会社を誇りのある会社にしていただきたいと思ひます。

皆さん 生涯は長いのであります。できれば気持ちのゆとりを持って、神経衰弱になつたりしないで進んで下さい。まあ、しかし、時には神経衰弱になってみるのも、生涯の長い日から見れば、ただごまかして生きるよりはいいかもしれませんが、しかし、あんまりひどくならぬうちに心を許す人々と相談して下さい。

さい。老人でよければ、よろこんで私どもも相談にのります。どうい話でも、話のできるような環境をつくりましよう。

私なども、大学一年の時に一時非常な混迷に陥って、もう少しして今日こうして皆さんの前で話をするような歳まで生きられなかったかもしれないのであります、どうやらそれも無事に乗り越えました。その時私に救いの声をかけてくれたのは、ほかならぬ楽聖ベートーベンであります。この話はまたほかの機会にいたしたいと思ひますが、あのベートーベン

が二十五歳の時に、やはりみずから命を断とうとしたことがあるのであります。そして自分に向かって叫んでおります。

「勇気を出せ、たとえ肉体にいかなる弱点があろうとも、わが魂は、これに打ち勝たねばならぬ。二十五歳、そうだ、もう二十五になったのだ。ことしこそ男ひとりほんものになるか、ならぬかをきめねばならぬ」これはベートーベンのある日の日記の一節であります。あの楽聖ベートーベンにして、なおかつ然り。まして自分のごときぼんくらが迷うのも無理からんなあ、そうあきらめがついて、文字通り命がけの勉強を始めたのであります。

皆さん！今日から新学社の社員である皆さん！どうぞ人生というものを十分落ちついて考えながら、そしてその日その日の仕事をひとつひとつ片づけて下さい。そしてこの新学社の空気を、さらにいままで以上によくなるように、お力添えを願いたいと思います。

ありがとうございました。

平澤 興 氏 著書「がんばろう」より転載